

全編
快感による
精神破壊
洗脳調教

アヤ

男を服従させて愉しむS女

怪しいメールとともに送られてきたAV——
犯されていたのは会社の上司だった。



愛梨

利用する為に男を壊す悪魔

男を墮とす最強タッグ!!
彼女たちの目的は一体?!

傾向音
KKO

悪女が撮ったAV
マゾ男優の関係者の皆様へ

アヤ
愛梨

124page
¥700+税
KKO-010

本当はイキたかったんでしょ？
知ってるよ♡ 大丈夫だよ♡

そう、やっと認められたね♡
フフ、ご褒美上げなくっちゃ♡

毎週、送られてくるAV。
その中で厳格なはずの上司が犯され、
女性たちの奴隷へと堕ちていく。

次第に俺は
自分も同じように犯されたいと
思うようになっていった。

それが彼女たちの目論見であることも気づきながら。

イッていいの？だめなんですよ？
んふ♡ もっと苦しんでください♡

……もっと奴隷らしくお願いして？
楽しませてくれたら考えてあげる♪

いいよ♡ 幸せなお漏らししていいよ♡
あ〜あ♪ だらしな顔さらしちゃって♡

傾向音
KKO

制作: 傾向音
製品番号: KKO-010
HP: (<http://tendencytone.blog.fc2.com/>)

※本作はテキストつきイラスト集です。
文字あり: 124page 全体: 249page
作品形式: jpeg
価格: ¥700+税

午後十時。自室のPCでAVを視聴している。
配信サイトで購入した「素人M男の洗脳」という作品だ。

切っ掛けは一通の奇妙なメールだった。

件名「マソ男優の、関係者の皆様へ」。本文には一行のURLのみ。

どっ見てもスパム。だが俺は迷った末にこのURLをクリックした。
理由のひとつは、メール送信者のアドレスが俺の会社のドメインだったこと。
もうひとつはアクセス先がよく使うAV配信サイトだったことだ。

開かれたのがこの作品の紹介ページだった。

一見、他のAVと変わらない内容だったが、よく見ると不審な点があった。

例えばサンプル画像や紹介文などの情報が全く掲載されていないこと。

あるいは、一週間の視聴期限が設けられた購入方法しか選択できないこと。

だけどそんな異質は俺にとつて、気にするほどのものでもなかった。

ページの一番目立つ位置に配置されたパッケージ画像の不可解さに比べれば。

その画像の右半分では、主演女優と思しき女性が一面を占めている。

くっきりした目鼻立ちの相当な美人だが、まあそれはいいとして。

ディスクパッケージで言えば裏表紙にあたる左半分。

並べられた画像のいくつかに小さく写り込んでいる男性。

細い黒線で目隠し加工がされているが、一発で思い当たった。

——あれは飯野課長ではないか、と。

俺の上司で、立場の割に若く、優秀でお堅い、上層部の信頼も厚い人物。

それが「素人M男」としてAVに出演している。

そんな馬鹿な話があるはずないと、最初は自分の目を疑った。

だが同時に気づく。——「マソ男優の、関係者の皆様へ」。

あの不審なメールは、何者かが飯野の秘密をバラす為に送信してきたのではないか。

そう考えるとすべてが気になっぺ。

印象的な見た目をしているのに他の作品では見かけたことのない女優も、
売る気があるのかと疑いたくなるほど情報の少ない作品ページも、
視聴期限一週間で三千円という高額で限定的な販売方法も、
女優でなく男優にフォーカスした妙なタイトルも。

結局、俺は確かめずにいられなかった。

このAVの裏に隠されていると思われる「何か」の、正体を。

視聴を開始すると、タイトルもなく本編が開始される。

映し出された白い部屋は広くて小ざれだが、物が少なくてかなり寂しい。

画質もあまりよくなく、全体的にAVとして洗練されていない印象を受ける。
聞いたことのないレーベルの作品だし、お金も掛かっていないのかも知れない。

画面の中央では一人、男性が椅子に座らされている。
バツケージにあった目隠し線はなく、不安げな表情が見て取れた。

——間違いない。

見慣れた顔。背格好。着ているスーツにも見覚えがある。

確信を得ると同時に心音が高鳴る。

知っている人物、それも上司がAVに出演している。

他人の秘密を垣間見る背徳感のような、優越感のような、
暗い悦びが頭の中を席巻していくのを感じる。

そのまま十秒ほどが経ち、唐突に靴音が響いた。

飯野は驚いたように肩を跳ねさせた後、どういわけか股間を両手で押さえる。
顔には焦りと恐れ表情が浮かんでいる。

画面からあふれ出る緊張感に、俺は思わず生唾を飲み込んだ。



直後、画面に入ってきたのは、パッケージのメインを飾っていた女優だった。

はつきりした目と顔の輪郭。少し大きめの口。肩に届かないくらいの髪。

人によって好みはあるだろうが、少なくとも記憶に残るタイプの顔をしている。

歩く姿から漂うのは聡明な印象で、気を抜くと呑まれてしまいそうな雰囲気がある。

紹介ページによると女優名は「愛梨」。視聴前に検索したが他の出演作はなかった。

彼女は飯野の前で止まると、落ちて着いた微笑みで目を見つめた。

「…やめてくれ。」と、飯野が言う。

聞き慣れた上司の声がわずかに震えている。

何かに恐怖を感じている様子だが、それが何なのか俺には見当もつかない。

——ヤバイ。なんか異様に……興奮する……。

彼がAVに出演した経緯も、そのAVが俺に送られてきた理由も分からない。だから先の展開も予想がつかない。様々な妄想が頭を巡って止まらなくなる。

愛梨は微笑み続ける。その色気に、俺も呑まれてしまっているのかも知れない。





「なにを、やめて欲しいの？」

静かに言っ、彼女は飯野の体にそと手を触れながら周りを歩き始めた。

飯野は触れられた箇所をビクリと震わせて生唾を呑む。
ぎゅつと股間を抑えていた手には力がこもっている。

やがて、紅潮した顔から吐息交じりの小さな声が発された。

「射精…したくない。」

その答えにクスクスと笑いつつ、愛梨は指先で飯野の肩を撫でる。

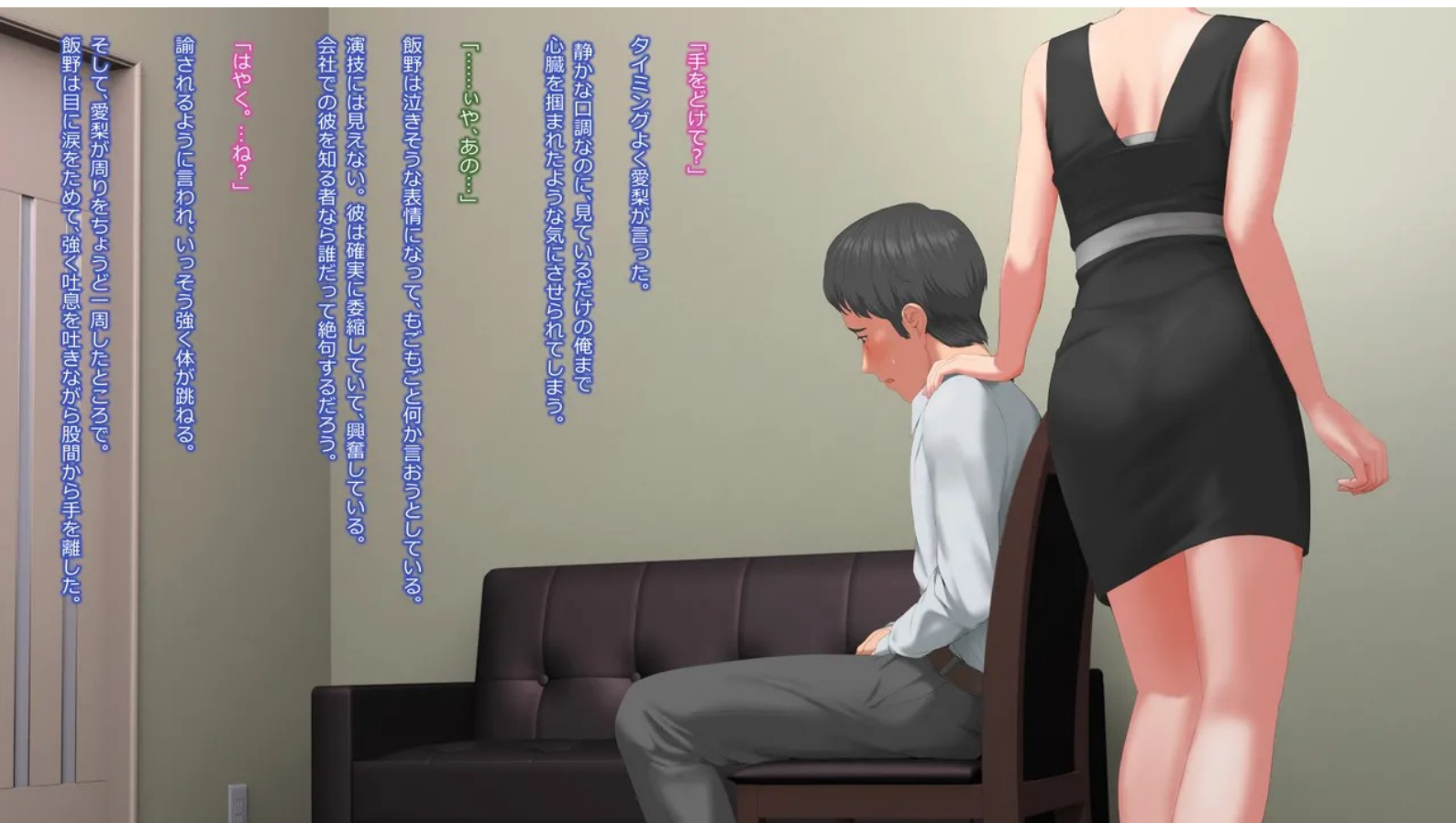
ゆっくり歩を進めながら、彼が必死で抑えている股間に視線を向けて。

「ほんとに？」

優しい気なのに、精神的に追い詰めるような、不思議な迫力のある声色だった。

飯野はまた体を震わせて、ほとんど喘ぐように小さく荒い呼吸を繰り返している。

その姿は恐怖してらるまじにも、期待してらるまじにも思えた。



「手をどけてよ」

タイミングよく愛梨が言った。

静かな口調なのに、見ているだけの俺まで
心臓を掴まれたような気にさせられてしまう。

「……さや、あの……」

飯野は泣きそうな表情になって、も「さや」を何か言おうとした。

演技には見えない。彼は確実に委縮していて、興奮している。
会社での彼を知る者なら誰だって絶句するだろう。

「はやく……早く」

諭されるように言われ、いつそ強く体が跳ねる。

そして、愛梨が周りをちよと一周したところで。

飯野は目に涙をためて、強く吐息を吐きながら股間から手を離した。

「フフ♥ 射精したくないんじゃないの？」

服の上からでも分かるほどに勃起した股間を見て、愛梨が言った。
「飯野は視線に耐えかねたのかうつむいて黙り込んでしまった。」

推測するに、飯野はこれまで何度か射精させられたことがあるのかも知れない。
その結果、射精を恐怖するようになった。そう考えれば今の反応も納得ができる。
同時に期待しているように見えるのも、その快楽を知っているからだろう。



「さあ、じゃあ腰浮かせよう」

変わらず微笑みを浮かべながら、愛梨は優しく語り掛ける。

飯野はほとんど泣きそうになりながらしばらく躊躇するが、やがて言葉に従った。
結局、逆らえない。二人の関係はすでに確たるものになっている様子だ。

彼の反応が過去の経験に基づいたものだったとして。

何をされたらこれほどまでに射精を恐れ、そして期待してしまっようになるのか。

それをこれから見る事が出来る。

俺はもう、謎のメールとか上司の秘密とか、そんなことはどうでもよくなっていた。

抵抗していないのだから当然だが、愛梨は簡単に飯野の下半身を露出させた。言い逃れしようのないくらい勃起したペニスが、粗いモザイク越しに脈打っている。

「クス。…ねえ、私にウツついたの？」

「ちが…… 本当に…本当にしたくない…… 射精……いや、だ……。」

やはり、到底演技には見えない。許しを請うような表情は必死そのものだ。だが、ならばなぜ逃げないのか。抵抗しようとすらないのか。



愛梨の表情は変わらない。この余裕は容赦がないことの表れともとれる。これから彼女は飯野を射精させる。微笑みは、その意思が揺るがない証拠だ。

「あああ……。頼む…。許してくれ……。頼む……。」

察して、再認識したとでも言うように、飯野は懇願の言葉を響かせた。恐らく彼は最後まで抵抗できないのだらう。

それを理解しているから、こんなにも絶望に満ちた表情で、裏腹にペニスを硬直させてしまっているのだ。

取り乱すほどに、俺はこれから彼に与えられる快感を想像してしまう。

「ふっ~~~~」と、愛梨がペニスに息を吹きかけた。

それだけで飯野は全身を身もたえさせ、歯を食いしばる。甘く、優しく、長く。見るからにもどかしく、そんな刺激。



やがて、愛梨はクスリと笑い、飯野の目をのぞき込むように言った。

「射精したくないなら、我慢してもいいよ。」

飯野は首を振る。「やだ……無理だ……無理だから、やめて」

「じゃあ、射精するしかないね♥」

微笑みに妖しさが混じる。言いようのない色気が画面を越えて伝わった気がした。彼女は飯野を見ているのに、自分が見つめられているような錯覚を起こした。

俺はほとんど無意識に、自分のスポンに手をかけていた。

先程の飯野と同じように腰を浮かせ、脱がされる想像をしながら一気に手を下ろす。

俺に飯野を唾うことは出来ないだろう。

ペニスはすでに限界まで屹立して、切ない透明で先端を濡らしていた。

不意に画面が大きく揺れたかと思うと、視点が愛梨の顔の付近へと接近していく。そういえばこれはAVで、当然、出演者の他にもスタッフがいる。

「あ……ま……っ……っ……」

何かを察したように、飯野が焦りを含んだ声を上げた。彼の顔は既に画面の外に出てしまっている。表情は見えない。

「ふんふん、またまた勃起っすわな」

ペニスにさらに顔を近づけて愛梨がほほ笑んだ。



目を澄ましてみるが、それほど多くの人間が部屋の中にも思えない。

飯野は先ほどから純粹に愛梨の言動だけを気にしている様子だし、恐らくは彼女が監督のような立場を兼ね、飯野とカメラマンを含めた3人で撮影しているのだろう。

「あ……ああ……っ……っ……」

諦観が混じった飯野の喘ぎ声が響く中、愛梨の口元がペニスに迫る。ゆっくりと焦らすように、絶望を煽るように。

「~~~~~」

艶を帯びた唇の先端が亀頭に触れた瞬間、全身を震わせる飯野。
愛梨は目元に笑みを浮かべながら、這初めた舌と口を滑らせて先端を咥え込む。

そこで一旦、動きが止まった。—— よろに見えた。

飯野の呼吸が徐々に早く荒くなり、足がビクビクと痙攣し始める。

じつと彼の顔の方を見つめる愛梨。

時折クスクスと漏れる声を近づいたカメラが拾う。

「やめ やめ、ってえ」

腰を跳ねさせながら、飯野が身もたえを始めた。

予想だが、愛梨は亀頭を咥えながらその先端を舌で舐っているのではないか。

激しい責めではない。性感を高める目的でチロチロと執拗に。

「飯野は射精の恐怖も相まって、本来の快感以上に反応してしまっているのだ。」

そのもどかしい刺激と飯野の置かれた立場を想像しながら、俺も右手で先端を擦る。
カウパーを塗り広げながら、優しく、あくまで画面から目を離さず。

ビクビク

チロチロ

ビクビク



シューシュー

喉の奥で笑い、一瞬ためを作ったあと、愛梨の顔が沈み込み始めた。口を窄めながら、一定の速度で滑らかによどみなく。

飯野は全身を力ませている。射精感を少しでも近づけないようにする試みだろうか。だが、彼は決して愛梨の動きを邪魔しようとはしない。

時おり手が画面に写るが、快感に翻弄される心情を表すように行き場なく漂うばかりだ。

ニヤカ



必死の様子を見れば抵抗心が本物であることはわかる。

だがその気力は、ただひたすら我慢することのみ消費されている。消費されているのだから尽きる時が来る。

だからこそ彼は、こんなにも絶望に満ちた声色で、気持ちよさそうに喘ぐのだろう。

抵抗してはいけない理由は分からない。脅されているのか、賭けてもしているのか、あるいはAVのタイトルにある通り「洗脳」されているのか、いずれにせよ、我慢することしかできない立場で好きなように責め続けられるのは、少なくとも傍からみている分には、大いに劣情を掻き立てられる状況だ。

ヒクヒク

「ひんあうー」

根元まで啜え込んだ唇が、微かな水音を立てながら先端に戻ってくる。飯野は引つ張られるように腰を浮かせながら甲高い声を上げた。もちろん愛梨は気にした様子もなく、また深く啜え込み始める。

「ダメダメですっ！ やめっ！ やめてくださいー！」

口でペニスを扱かれる。そのスピードが増すごとに飯野の口調が焦っていく。余裕が無くなってきたのか敬語になる。何とか慈悲を与えてもらおうとするように。

ブルブル...

あう

あう

愛梨は言葉を見殺しして、飯野に笑顔向けながらひたすら責め続ける。浅く啜って舌で亀頭を舐ったり、限界まで深く飲み込んだり。激しいフェラチオにもかわらぬ相手の反応を見定めながら的確に追い立てる余裕もある。

「いやだっ！ ああっ！ やだっ！ やだ、やだやだやだっ！」

恥も外聞もなく悶え叫んでも、飯野が限界を迎えるまで2分とかからなかった。

「まっ！ あっ！ まっ！ お願いしますっ！」

「どうしたの？」

愛梨は唐突に口を離して言った。驚くべきことに、ほとんど息も荒れていない。一方で飯野は、質問に答える余裕もないほど全身を強張らせて悶えている。

「十たくななら、我慢すればいいじゃないっ。——ねっ」

優しい口調で子供に当たり前のことを説明するようだ。そのくせ明らかに、それが不可能であることも理解している。

あの普段は落ち着いていて威厳のある上司があんなに無様に乱れていたのだから、どれほど射精を恐れているのかは容易に推測できる。だが、もう限界なのは間違いないだろう。

むじむじとまで堪へた。



圧倒的な立場の差。

今だって、彼を弄ぶためにわざと口を離しているに過ぎない。

画面に映っていない彼の表情を想像して、俺の理性は焼き切れそうになった。

「じゃ、言われた通り待ってあげたら——再開ねっ」

与えられた猶予は、たったの三十秒程度だった。

俺はしっかりとペニスを握り、映像の中の高速フェラに合わせ抜く。
興奮のせいですべてが高まりつつある射精感を必死で我慢しながら。

「ひゅっ……んんん……ふっ……あぁっ……ふら……っ……」

飯野は完全に余裕をなくし、手足をぼたぼたせたり太腿を掻きむしったりして、
歯を食いしばって強く呼吸することゝる気を反りせよっつてくる。な
たひたひ喘ぎ声に分断されては乱れ、悲壮さを増して荒くなる。

本当に射精したくない、その真剣な気持ちが画面越しに痛いほど伝わってくる。
そのたびに俺の興奮も増幅し、ヒリヒリと全身に電流が走る感覚がした。



「ん……んんんん……」

愛梨はペニスを緩めて飯野の必死さを嘆う。ギリギリで追い詰めて愉しむように。
そしてまた激しく責め立てて、その繰返して徐々に彼を狂わせていく。
男を追い立てる巧みな術に、ただ見ているだけの俺すら正気を失っていった。

やがて彼女は完全に停止した。ラストスパートを前に、相手の覚悟を問うように。
飯野は察し、あらゆる力の力を全身に込める。無駄な抵抗と知りながら。

悪魔かど、思った。

「ん、ぶはあつっ」

飯野が耐えきつたわけじゃない。
愛梨が、本当の限界を見極めて加減したのだ。
妖しく歪んだ愉しそうな笑顔がそれを証明している。

飯野は激しく何度も全身を痙攣させ、腰をくねらせて悶絶し続ける。
カメラが再び引いていき映り込んだ表情は、異様に紅潮し、様々な汁で無残に汚れていた。

どれほど追い込まれたら、ここまで我慢できるのだろうか。

リアリティに欠けるが、命でも賭けさせられているのではないか。

彼の抵抗にはそれくらい、理性を超えた必死さが垣間見える気がする。

俺が見ている物は、何か尋常ではないものなのではないか。

背筋が凍るような感覚とともに、心音が一段高鳴るのを感じる。

画面の中では、ピクつきを繰り返すヘニスに愛梨が手を伸ばしている。
どっせ射精させるつもりなら、いっそ一思いにとどめを刺してあげた方が苦しまずに
すむはずなのに、彼女はまたいたがるつもりようだ。



先端を包み込み、手首の回転で細かく刺激しながら。観察するような視線を向けて、愛梨は優しく微笑む。

飯野は泣きそうな表情になりながら何度も首を横に振る。もっこれ以上は無理だと。お願いだから許して欲しいと。届かぬ切望を懸命に視線に込めている。

「ん？ 何したの？」

分かりきったことを聞くのは、取り合つつもりがない意思の表れ。余裕をなくした飯野にとっては、無視よりも拒否よりも残酷な反応かもしれない。

「やめて下さい……。お願いします。……許してください。」

「クッやめて欲しいんだ。そっか、このままじゃイヤっちゃんね♡」

「う…あ。…あああ……。」

もっ
もっ

言葉で共感を示されても、止まってくれない気がない。飯野は絶望したように頂垂れるが、それでも我慢だけは続けている。相手の気が変わる奇跡を信じる以外に、続けるものがないのだろっ。

ゆっくりと上へ下へ、愛梨はペニスを扱き始める。
一定のペースで、止まる気配もないが、速くなる気配もない。

先ほどのフェラと比べても、一見、楽な責め。
飯野も呼吸を荒げるだけで、大きく喘いだり身もたえしたりはしていない。
だがこれもまた、射精を我慢している彼にとっては残酷な責め方と言える。

「ダメ——ダメです…。これ、これヤメてっ。これダメだよ……」

例えゆっくりでも、コップに水が注がれ続けられればいずれは必ず溢れる。
射精感をギリギリまで高められた直後であれば、なおさら予感強く明確になる。
回避し得ない結末を理解して待つのは、「気が終わらせられるより何倍も辛い」。

「大丈夫だよ♥ イッても。」

同じように自分を責めている俺にも刺さる。甘んじようか。

「せー我慢かなんてさっさとやめなよ♥」

一言ごとに射精感が倍々膨れ上がる感覚。それは飯野にやっついても変わらなかつた。

「もう終わりだね。」

愛梨の笑顔のセリフに途端に怖くなる。本当に命が掛かっていたら、と。だがもう俺も引つ込みがつかない。気を抜けばすぐにでも漏れてしまいそうだ。

「ふうふうふうふうふうんあああああ、あああ、ああああんっ！」

ほとんど叫ぶように飯野が長くあく。
そこに全く変わらない調子の愛梨の声。

「本当はイキたかつたんでしょ？ 知ってるよ。大丈夫だよ。」

何も大丈夫でないことは、飯野の反応を見ていればわかる。
だが極限状態ではこういうセリフが引き金になりかねない。

「イクッ……！ イクッ……！ イクウウウウ……！」

愛梨の手の中でペニスに異常なほどに痙攣している。
まだ、こんな状態でもまだ彼は必死に力を込めて抵抗を続けている。
だが、今更何をしようが遅い。

愛梨がクスクスと笑い始め、飯野が大きく息を吸う。それが、終わりの合図だった。



「あああ〜」

凄まじい量の精液が先端から吹き上がり、彼自身の体に落ちていく。痙攣はいつまでもやまず、顔は白目をむいたように現実ではないどこかを見つめ、手足の先端に至るまでまんべんなく紅潮させながら汗を噴き出す。

延々と延々と。

俺も彼と同じタイミングで射精していた。

普段AVで自慰するときとは比べ物にならない破格の絶頂感だったし、集中していたおかげか、愛梨に射精させられているような没入感も味わえた。

だが精液の量も体の反応も飯野のそれには遠く及ばない。彼と同じくらい本気で抵抗することが出来ないしあんな風にはならないだろ。

最後の一滴まで絞り出すように、愛梨の手がペニスを優しく往復している。

「お疲れ様。今日も気持ちよかったね♡」

画面越しでは、飯野にまともな意識が残っているのかも分からない。気絶していても不思議じゃないくらい激しい絶頂だった。

ただやはり、今日のようなプレイが何度も繰り返されていたのだろう。タイトル通りこれが洗脳であるとするなら、射精させることで何かしらの暗黒を刷り込んでいるのかもしれない。

飯野の恐れようもそれと関係があるに違いない。だとすれば、一体、何を刷り込まれているのだろうか。もし俺が同様の洗脳を受ければ、あれだけの異常な絶頂を味わえるのだろうか。

「じゃあ、またね。」

終了間際の愛梨のセリフは、俺にも向けられているような気がした。深い快感の余韻の中で、その言葉は何度もリフレインして離れなかった。



一時間に満たない再生時間で三千円。

しかも一週間の期限付きだから、やはり他のAVと比較しても割高である。内容もセックスなしのワンシーン。喘いでいるのは男のみ。何人が購入者がいるようだが、当然、評価の方は振るわない。

だけど気づけば俺は、この動画で何度もオナニーするようになっていた。

そのせいか、会社では飯野の様子が気になって仕方ない。

AVでの乱れっぷりなど微塵も感じさせずに普通に仕事をしているが、よく見ると不審な行動もしている。忙しい時期でもないのに毎日の様に残業したり、かと思えば就業時間中に頻繁に席を外して人気がないところで電話をしていたり。

注視しているから気づいただけで前からそうだったのかもしいないが、俺の思考回路はどうしてもAVに出演していることと関連付けて考えてしまう。

電話の相手は愛梨なのではないか。

それで仕事に手がつかなくなつて残業せざるを得なくなっているのではないか。

そんなふうを考える度、あの映像がフラッシュバックする。

身体が強烈な射精感を求め、家に帰るなりAVを再生してしまう。

体力の続く限り、取りつかれたように何度も何度も見てオナニーを繰り返す。

飯野に自分を重ね、愛梨に犯される想像をしながら、必死に抵抗しては敗北させられる。視聴期限が近づいても満足するどころか欲求は増すばかりだった。

一週間が経ち、俺は当然のように作品の再購入を考えたが、それは出来なかった。どういわけか配信が停止されていて、紹介ページも消えていたのだ。

俺はしばらく呆然とした。自分がおかしくなるほどのめり込んだことを自覚し、同時に行き場のない性欲がさらに正気を蝕んでいくのを感じながら過ごした。

しかしそれも長くは続かなかつた。

翌日、一週間前と同じように会社から帰ったところに届いたメール。タイトルはやはり「マソ男優、関係者の皆様へ」。

ほとんど無意識だった。

本文のURLから作品ページに飛ぶ。パッケージ画像に愛梨の姿を確認。

購入方法は変わらず三千円/一週間。購入ボタンをクリック。

一分にも満たない時間で手続きを済ませ、興奮に息を弾ませて視聴を開始する。

今回はまずタイトルが表示された。黒背景に白文字のシンプルなものだったが。

「素人M男の洗脳 素直なキモチ編」

俺はようやく我に返り、ああ前回の続きだろうかと思つた。

ブツリと画面が切り替わり本編が始まる。やっぱり編集は野暮つたい。

二人が寄り添って立っている。

足を絡ませて手を重ね、一見、普通の男女関係を連想させる密着具合だ。だがよく見れば、上半身裸の男性が不安げな表情を浮かべ、服を着た女性がそれを微笑みながら観察しているという構図は、AVとしても一般的ではないだろう。

飯野は自らの手を弄ぶようにさせる愛梨の動作を気にしつつ、時おり画面、というかカメランの方に視線を向けている。

前作はカメランが女性だった。何度も見ているうちに気づいたのだが、飯野が激しく乱れている場面などで、愛梨とは異なる笑い声がかすかに入っていた。

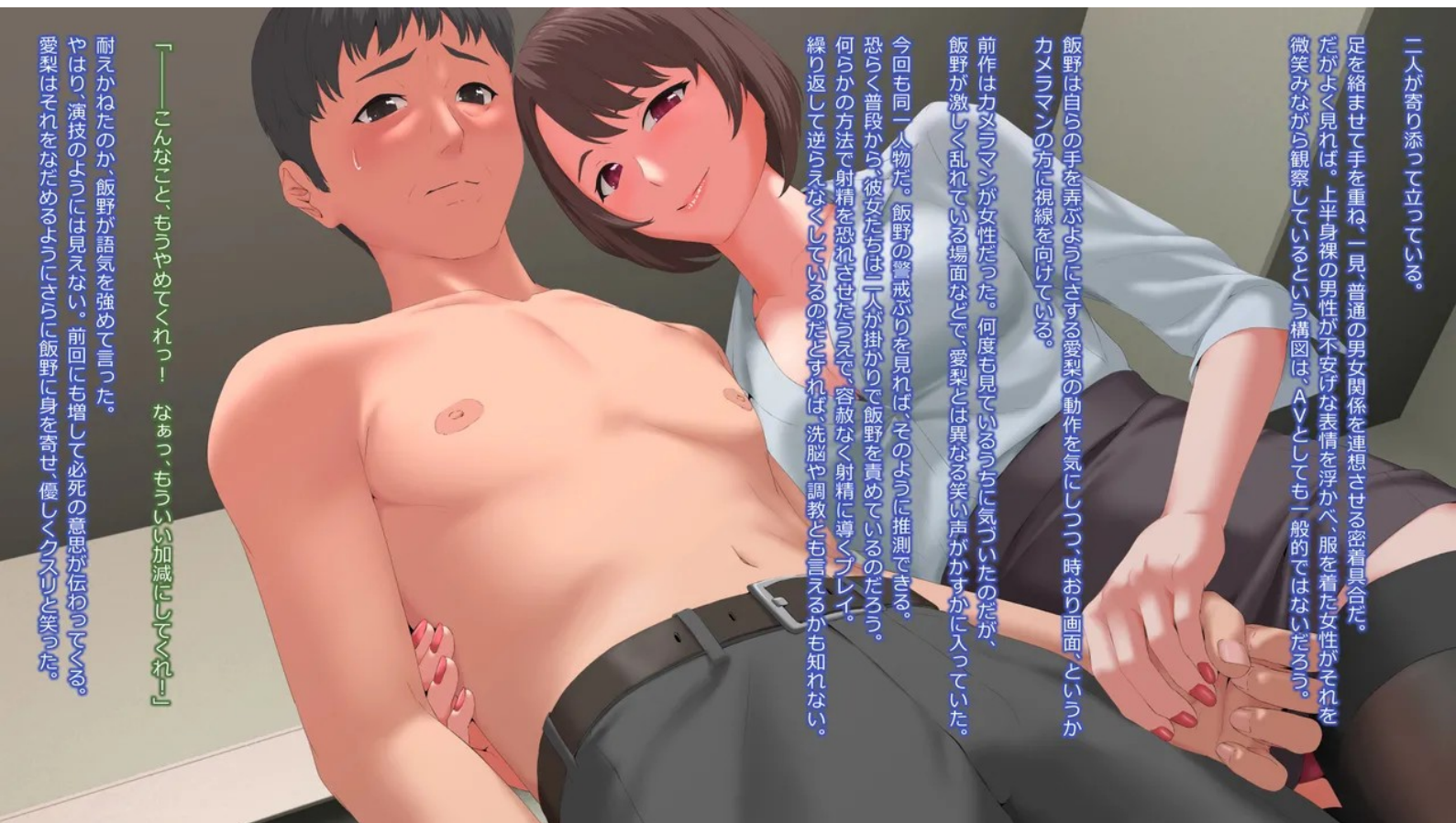
今回も同一人物だ。飯野の警戒ぶりを見れば、そのように推測できる。恐らく普段から、彼女たちは二人が掛かりで飯野を責めているのだろう。何らかの方法で射精を恐れさせたうえで、容赦なく射精に導くプレイ。繰り返して逆らえなくしているのだとすれば、洗脳や調教とも言えるかも知れない。

「こんなこと、もうやめてくれっ！ なあっ、もういらぬ加減じじいねっ！」

耐えかねたのか、飯野が語気を強めて言った。

やはり、演技のようには見えない。前回にも増して必死の意思が伝わってくる。

愛梨はそれをなだめるように丁寧に飯野に身を寄せ、優しくクスリと笑った。



「まだ素直になれないの？ 今日はお射精できなくていいの？」

説得するよつに声をかけながら、指先を彼の乳首に触れさせて輪郭をなぞる。それだけで途端に口をつぐむ飯野。前作の反応から察するに、彼の理性は本気で射精を拒んでいるのだが、肉体の方は完全に飼い慣らされてしまっているようだ。

「無理じゃなくていいんだよ？ ……それとも、キモチの嫌になっちゃった？」

アルコールを断とうとしている人に、一杯だけと唆すよつな。

それが楽しくて仕方ないというふうには、愛梨の声は軽く弾んでいる。

そして、そのトーンをそのまま吐息に変えて、彼の耳に吹き込んだ。

「…じゃあ、なんで抵抗しないの？」



おっぱい

ソクソクと言を立てるように飯野の体が細かく震え、熱い吐息を漏らす。前回の様に無理やり射精に導くのではなく、言葉で理性を崩すつもりらしい。

快楽を求める本能を抑えられなくしてやれば、容易に射精させられる。なるほど、それで副題が「素直なキモチ編」というワケか。

飯野も意図を察したのだろつ。言葉聞き入れないように強く目をつぶった。だが、体の方は既に無様な反応を示してしまっている。

「ほら、すぐに興奮してオチンポ勃起ナ、ホントはシて欲しいんだよね。」

乳輪の縁をなぞっていた指先が、螺旋を描きつつ中心に近づいていく。飯野は「あ、あ」と喘ぎを喉の奥で殺しながら、ビクビクと体を跳ねさせる。

「ね、オチンチン、触っていい？ 嫌ならやめるからヤメテって言ってね？」

「瞬だけ乳首に触れた指が、爪を肌に触れさせながらツツツと降りてく。」

「あ……………や、や、あ……………」

「ん？ どうしたの♡ 嫌なら本当にやめるけど。」

本心を聞かれてすさまじい葛藤をしているものの明確な否定は出来ず。その間に愛梨の指先はヘルトの段差を超えて、中心の山を登り始めてしまつ。

「あ……………あ……………つああ……………」



そしてその頂点に到達すると同時に。——「カリッ♡」

「んはぁん——!!」

亀頭の先端を軽めに何度もひっかく爪先。そのたび、悦ぶような嬌声が響く。

「ダメエツ! や、やあ!ん——ひいんっ! ヤメ、ヤメッ!」

「なんで触られる前に言わなかったの? 本当はやめて欲しくなるとかびでこゅ」

執拗にカリカリと刺激しながら、問い詰めるように囁きを続ける。



「クスク、今日は素直にならなきゃイカせとあげないよ? ねえ、オチンチン、外に出していい? ……ねえってば、ちゃんと答えてくれないと、さっさとこのままだよ!」

滑稽にビクつき続ける飯野の姿に、その快感を想像しながら。動画とシンク口させるように、俺もスポンの盛り上がりをつっかいてみる。

もどかしい快感とともに駆け抜けたのは、言いよつない異様な興奮だった。

「フフ、じゃあお望み通り、オチンチン出してアゲルね♡」

からかうような声色で愛梨は言った。

赤く染まる飯野の顔に視線を向けたまま、器用にチャックを下ろしながら。

「よく我慢したね。辛かったね？」

開いた裂け目に手を入れて、その中でペニスをさすり労わるように。

「……うん」

飯野の口からは絶望と興奮が半々の配分で濡れ出している。

また今日も射精させられることが確定した。もうどれだけ我慢しようか無駄だ。そう思い込んでいる雰囲気がありありと伝わってくる。

「はーい♡ やつとお外にできるよー♡ 嬉しいね♡」

愛梨はそのままパンツもずらし、勃起したペニスを引きずり出す。

俺もタイミングを合わせて、興奮しながら自分のものを露出させた。



愛梨がソファーに腰掛けると、飯野は全裸になり彼女の足元で仰向けになった。カメラが動いて彼の顔は画角から外れたが、立てた膝の在り処を定められない落ち着かない様子や徐々に荒くなっていく呼吸は、明らかに以前より興奮している。

「最初、やめてくれて言うてなかった？ 私モイヤならやめるって言ったよね？
じゃあ、なんでこうなったの？ 誰が望んだんたろうね？ ——ねえ？」

止まらないペニスのピクつきが答え。その裏筋をストッキングに覆われた足が這う。

「…ん？ この「のせいにするの」？ この「はただ、欲望に素直なだけでしょ」？
その欲望は誰のもの？ ——あなたのモノ、だよな？」

質問を繰り返され、しかし答える隙は与えられない。ひたすら考えさせられる。自分に嘘をついていたことを、本当は自ら望んで堕ちたことを自覚させられる。理性と本能の矛盾が生む背徳に狂わされ、自ら腰を浮かせて擦りつけ始める。

「…いや、認められたね♡ フフフ♡」
「褒美、あげなくっちゃ♡」

愛梨の足が離れる。離れて、ペニスの先端から10センチ手ほど上でいったん止まり、そして「元の場所に戻ってる。当然、勢いをつけて。」



ズン、と腰ごと強く踏み込まれ、その衝撃で開いている膝が閉じそうになる。そのまま電流を流されたカエルのようにビクビクと全身を震わせる。

「……嬉……♡」

「ん……ん、ん、ん……」

ペニスの中腹に爪先をねじ込むように動かされ、飯野は声を上げた。それはどう聞いても悦んでいるふうで、愛梨も堪えきれずに笑いだす。

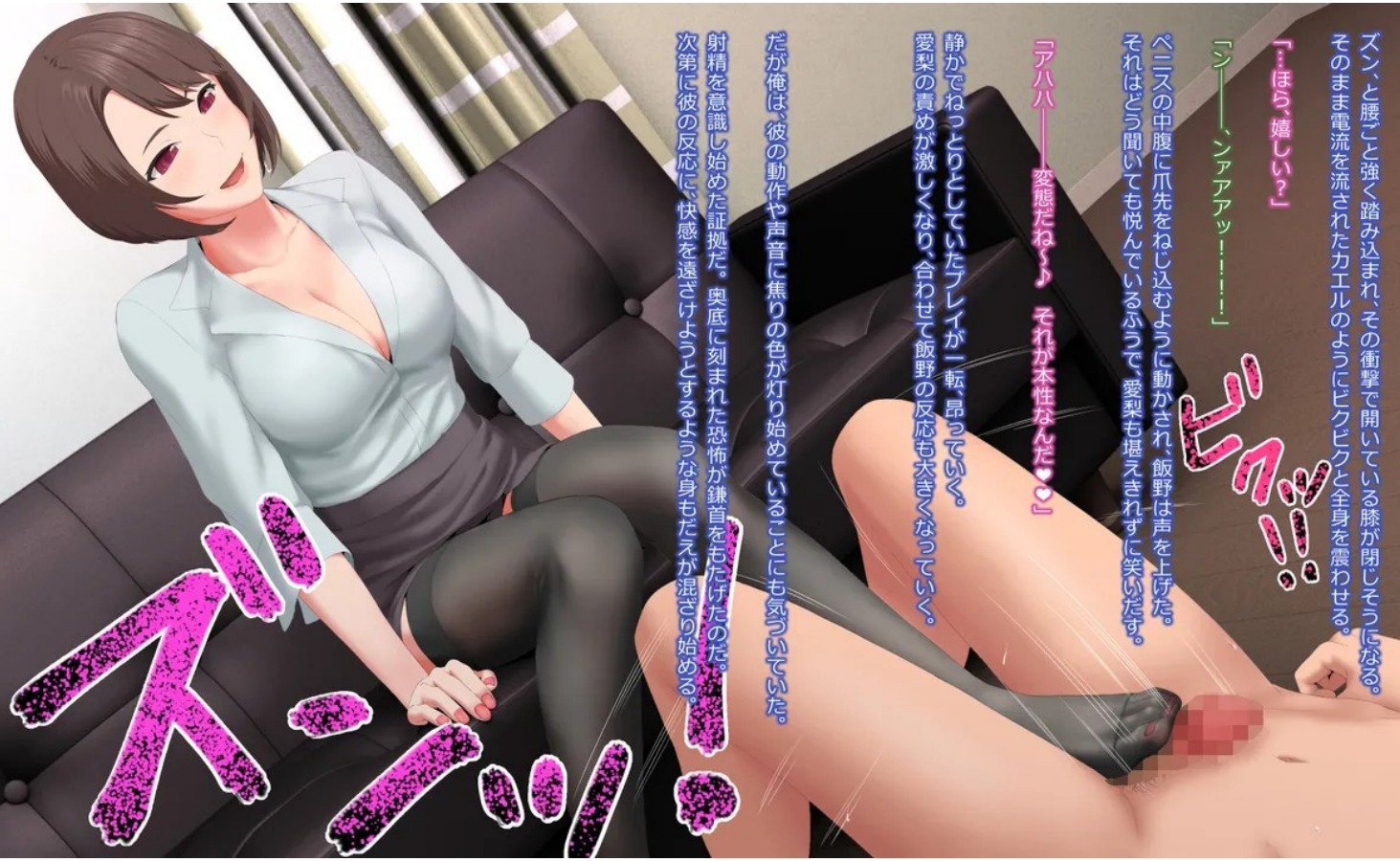
「アハハ……変態だね〜♪それが本性なんだ♡」

静かだねっとりとしていたフレイが「転、昇っ……」

愛梨の責めが激しくなり、合わせて飯野の反応も大きくなっていく。

だが俺は、彼の動作や声音に焦りの色が灯り始めていることにも気づいていない。

射精を意識し始めた証拠だ。奥底に刻まれた恐怖が鎌首をむたげたのだ。次第に彼の反応に、快感を遠ざけようとするような身もたえが混ざり始める。



「ふん……。クス、まだ素直になりきれないんだ。」

愛梨は妖しく微笑むと、足の動きをゆっくりとしたものへと変えた。ペニスを踏み倒しながら、その表面にストッキングを滑らせるように上下する。

「…怯えた目…もうやめるっ！」

飯野はもう答えられない。

なぜなら、ここまで来たのが自分の意思だからだ。

追い詰められてした選択でも、今さら無かったことには出来ない。

もろろん、続けて欲しいとも言えない。

恐れていることも、また事実なのだから。

だが、彼が最終的になにを選択するのは明らかだった。

「ほら、もっと素直になつていいんだよ。深く考える必要なんてないんだよ。望むなら続けてあげる。拒むならやめてあげる。——ね」

彼の本能はすでに服従し、完全に射精を望んでしまっている。脚が徐々に脱力していき、立てた膝を開いて受け入れる体勢が出来ていく。飯野は恐ろしくそんな自分の変化に気づけていない。



優しく微笑みながらの問いかけに、一瞬、ひくりと飯野の股が閉じかけまた開く。足がゆつくりとペニスの上を往復する度に閉じたり開いたりを繰り返す。まるで理性と本能、抵抗と屈服の拮抗をあらわしているかのようだ。

あれを無意識にやっているとするなら。

彼の頭は今、一体どれほど激しい葛藤が渦巻いているのだろう。

「素直にならな〜、素直にな〜」

本能側に強力な加勢が入るたびに股は徐々に開き、決着が近づいていく。楽しい気な声は彼女が意識的に彼をコントロールしている証拠だ。

飯野の必死の思いが視覚情報として入ってくる状況と、それを弄ぶ愛梨の振る舞いに俺はこれまでで最大の興奮を感じていた。理性が敗北して完全に屈服させられる瞬間を見ているような。

気づけば、俺の股も開き、手のひらでペニスを押し倒しながら擦りあげている。彼女の足の裏で脚を開かせて踊らされている、彼の気持ちを想像しながら。



「気持ちよくなる♥ 気持ちいいことだけ考えればいいの♥」

やがて、明確に膝の力が抜け始めた。股を閉じる動きが減り、徐々に開いていく。抵抗心が尽きたことを察したのか、クスクスと愛梨が笑う。

「大丈夫。射精は怖くないよ？ 私が見てあげるから♥」

「あ、んあ、あッ」

見計らったように足の動きが早くなり、飯野は快感を受け入れたように喘ぎ始める。

「ああッ！！！！ ああ~~~~~♥♥♥」

体を震わせながら、ビクリと全身が震えた。かと思うと、また膝が持ち上がって股が閉じ始める。

「イキそうなの？ 素直になったらキモチよくて堪らなくなっちゃった？」

なるほど、それは最後の無駄な抵抗。

意味のない葛藤の帰結は、やはり意味がない。

飯野の全身が強張り、今にも射精しそうな雰囲気。

そこで愛梨が足を離した。



「ほう、受け入れて？ トドメを望むなら、自らお股を広げるの。」

意思表示せよと愛梨は言う。素直な千毛子を聞くまでは射精させないと。飲んではいけないのに飲みたくなってしまつ酒はきつと最高の味がするに違いない。追い詰められて欲求を高められた上で、唆されて飲むのは最高の飲み方に違いない。

「わ？——そのほうが気持ちいいよ！」

最高の射精を愛梨は飯野に提示している。射精を恐れさせられていることも含めて。

俺も味わってみたい。

呑むか呑まないか、その最後の選択を迫られてみたい。

危険な望みだとは理解している。

だが、だからこそいい。懂れる。

飯野は狂ったように呼吸を荒げ始めるが、もはや抵抗の意思はない。射精感はすでに限界。射精するしかないのだから、より気持ちよく考える。そのためだけにただ葛藤するフリをしているだけだ。だがそれもすぐに終わる。

足が完全に開ききる。全身は脱力している。呼吸音は卑屈な笑いにも聞こえ、心が受け入れてしまった。ペニスは細かく痙攣し、その時を待っている。

「4分ほどはあった」——ちんちんが落ちていく。

足先が亀頭の下を捕らえる。
飯野の腰はそれを迎え入れるように一度浮かび上がり、
グーンと足全体で床に叩き付けられる。
同時に先端から精液が吐き出された。

衝撃に膝が力み、何度も何度もビクつきを繰り返す。
凄じ量の白濁がビュビュと短い間隔で勢いよく射出されていく。

イクッ………イクッ………イクッ………

数瞬遅れて、そこに叫ぶような声が乗る。
葛藤から解放されたことを喜ぶように、
意識を塗りつぶす絶望や後悔から目を背けるように何度も。

俺も同じタイミングで射精を迎えていた。
ティッシュを用意する余裕すらないほどに熱中していたため、
周囲に精液が飛散していく。動画に合わせて全裸になっておいてよかった。

本気で葛藤し抵抗するからこそ、それが崩されることに背徳的な快感を覚える。
敗北を認めて快感を受け入れることには、さらに特別な意味があるだろう。

想像しただけの俺でも圧倒的な余韻に襲われるほどだった。
飯野はもう、この快感のなかに一度は沈むことが出来なくなったに違いない。



「凄かったでしょ？ クセになっちゃったんじゃない？」

一度味わった快感がより強い恐怖の対象になる。
次に味わうときはさらに抵抗感が増し、

その抵抗が崩されることによる背徳感も増すことになる。
繰り返すことに強烈になる快感。
麻薬よりも恐ろしいスパイラルの中毒性。

「植え付けられちゃいけないもの、植え付けられちゃったねっ」

その笑みは嗜虐的な色が濃くなっている。
尻に嵌めた獲物を見下すように。

「じゃ、ペナルティだね♥ もっと取り返しがつかなくしてあげようからっ」

動画はまだ残り時間がだいぶある。
気になっていたが、このままプレイが続くようだ。

だが飯野はあれだけささましい射精の直後。
流石に頭も冷えているだろう———と思っただが、そんなことはなかった。

吐息には、抑えきれない熱のようなものが籠って感じられる。
そこには恐怖でも期待でもない、悦びのような感情が含まれている気がした。



飯野は言われるままベッドに仰向けになり、愛梨はその足の間で腰を下ろす。同時にカメラアングルも変わり、二人の全身が映し出された。

画面角に収まった飯野の表情は弛緩していて、

瞳も発情したように潤んでいる。

腰の真ん中ではすでに復活したペニス为天井を指し、

愛梨の濡れた両足に挟まれながら、

延々と脈打ち続けている。

俺の知る彼の面影はもう微塵も残っていない。

射精によつてすべて洗い流されて、

理性も意思もプライドも無くしてしまったかのように。

「マジローションでオチンチン濡めやうかよじりゃいいわ。」

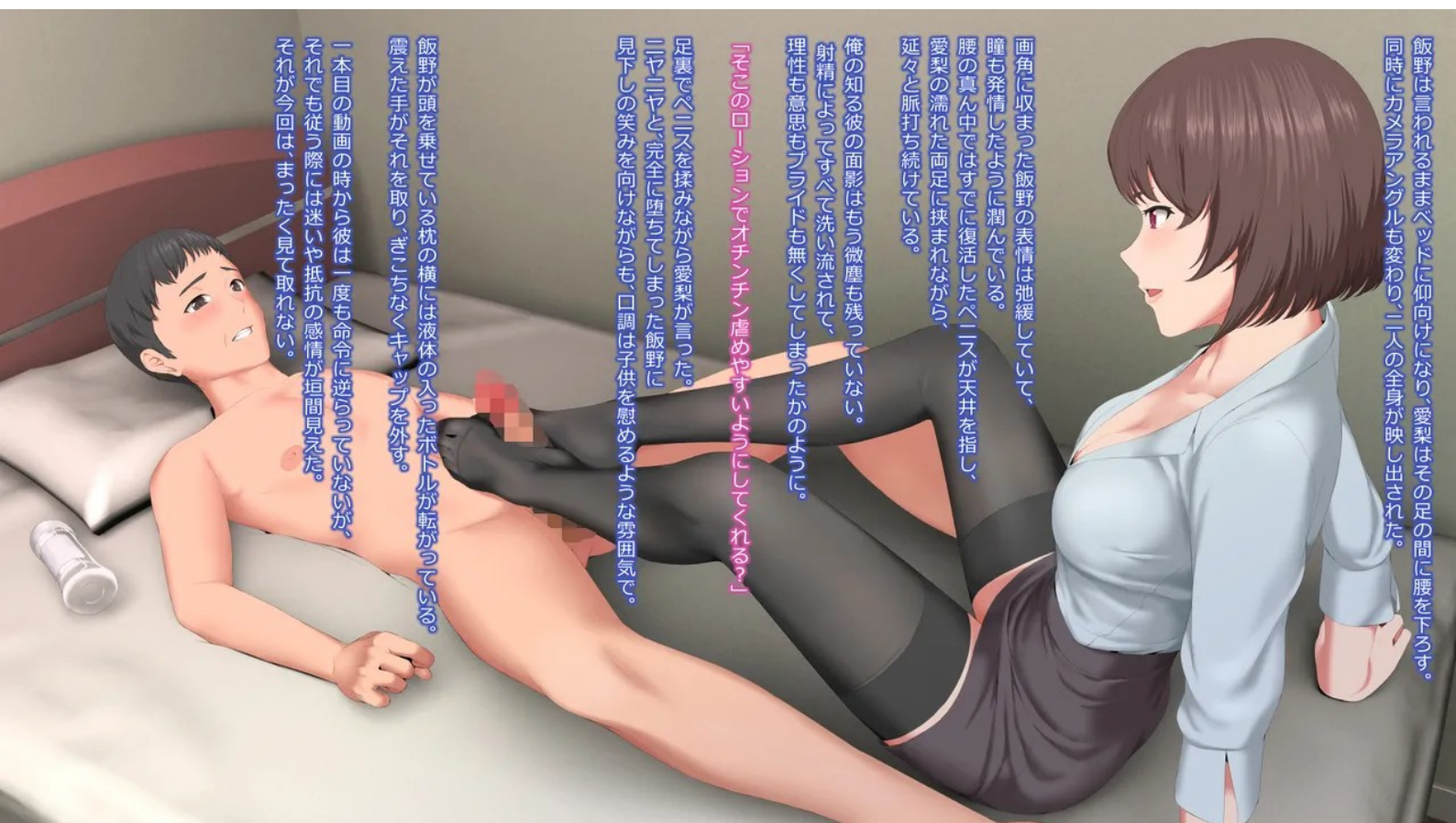
足裏でペニスを揉みながら愛梨が言った。

ニヤニヤと、完全に堕左ってしまった飯野に

見下しの笑みを向けながらも、口調は子供を慰めるような雰囲気だ。

飯野が頭を乗せている枕の横には液体の入ったボトルが転がっている。震えた手がそれを取り、ぎこちなくキャップを外す。

一本目の動画の時から彼は一度も命令に逆らっていないが、それでも従う際には迷いや抵抗の感情が垣間見えた。それが今回はまったく見て取れない。



飯野がボトルを傾けると、彼のペニスにドロツとした粘液が落ちていく。触れた瞬間に「くひひ」と食いしぼった歯の奥から声が漏れた。

「今日は二回も射精させられちゃう…♡♡、大変だね♡」

垂れてくるローションを塗り広げるように足をゆっくり動かしつつ、愛梨が笑う。なにか致命的なことになるとも言いたげな雰囲気だ。

飯野が失う「何か」について示唆しているのだろうか。射精回数によって対価が大きくなるという意味合いに聞こえる。とすると、やはりその具体的な内容が気になってしまふ。

仮に金を払わされるとしよう。
一回の射精で百万円、二回ならその倍とか。

極端な例だが、それでも死ぬわけじゃない。
射精した後で「払えない」と開き直ることだってできる。

これまでの飯野の反応から考えると、その程度の対価とは思えない。



「はい、もう十分だよ。準備完了だね♡」

「すねてせよ今の彼は抵抗するつもりか？ 思ってるけど、いいけど。」

愛梨の足がねっこの這うように上下し始める。

飯野は脱力して身を任せ、開いた口からの喘ぎも媚びるように奏でている。

「フ、素直になる幸せ、覚えちゃったね♡」

「これからは、射精させて一つでオネダリするようになったっちゃうかもね♡」

彼にとってそれは破滅と同義のはずだが、

今は恐怖を幸福感が上回ってしまっているらしい。

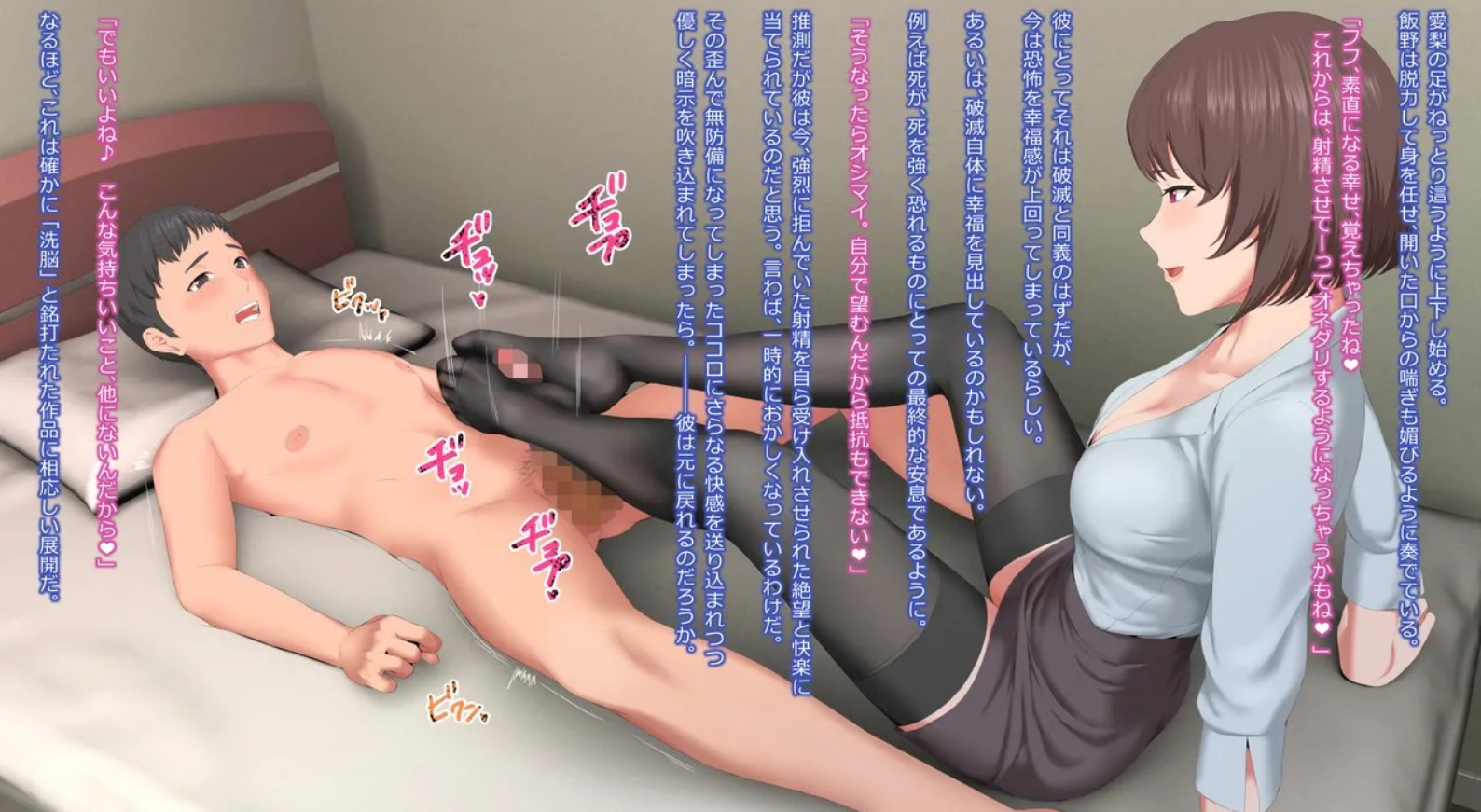
あるいは、破滅自体に幸福を見出しているのかもしれない。

例えば死が、死を強く恐れるものにとっての最終的な安息であるように。

「そっとなったらオシマイ。自分で望むんだから抵抗もできない♡」

推測だが彼は今、強烈に拒んでいた射精を自ら受け入れさせられた絶望と快楽に当てられているのだと思う。言わば、一時的におかしくなっているわけだ。

その歪んで無防備になってしまった「口」に伝わる快感を送り込まれつつ、優しく暗示を吹き込まれてしまったら。彼は元に戻るのだろうか。



「まさかいいよねっ、こんな気持ちいいこと、他にないんだから♡♡♡」

なるほど「これは確かに」「洗脳」と銘打たれた作品に相応しい展開だ。

足の動きが速くなり、器用に扱く様に上下していく。
すると飯野の反応が少しずつ変わり始めた。

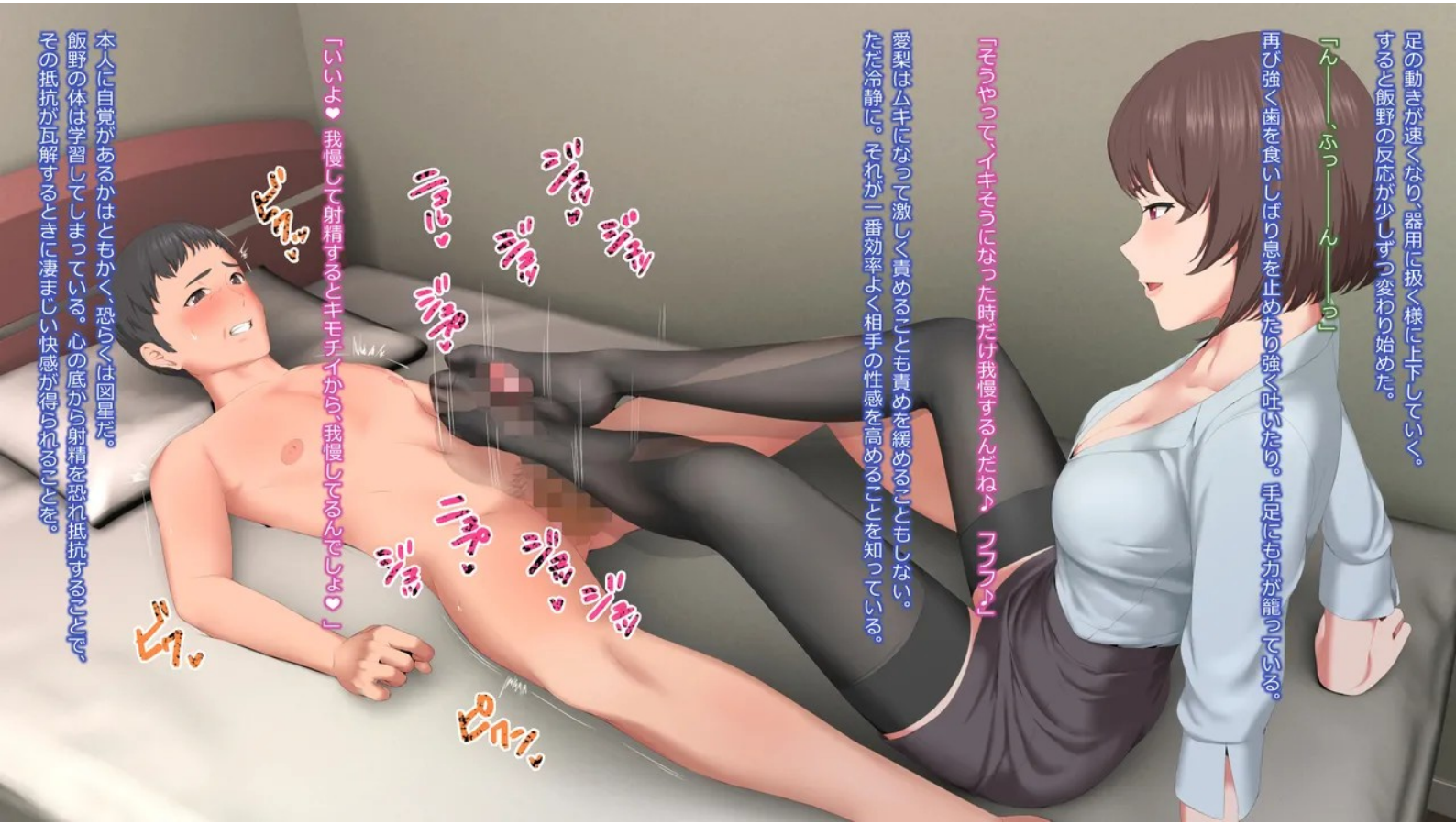
「ん、ふっ、ん、っ」
再び強く歯を食いしほり息を止めたの強く吐いたの。手足にも力が籠って来る。

「ぞっぞっ、イキそうになった時だけ我慢するんだね、んんん」

愛梨はムキになって激しく責めることも責めを緩めることもしない。
ただ冷静に。それが一番効率よく相手の性感を高めることを知っている。

「いいよ♥我慢して射精するとキモチイイから、我慢してるよ♥」

本人に自覚があるかはともかく、恐ろしくは図星だ。
飯野の体は学習してしまっている。心の底から射精を恐れ抵抗するほど、
その抵抗が瓦解するとき凄まじい快感が得られるのだ。



凄まじい声を上げて飯野は絶頂を迎えた。
二度目とは思えないほどの精液を噴き上げて。

さすがの愛梨も一瞬、目を丸くするくらいだった。

「クハハハ、すーすー」

それでも足は止めず、最高速で扱って促し続ける。

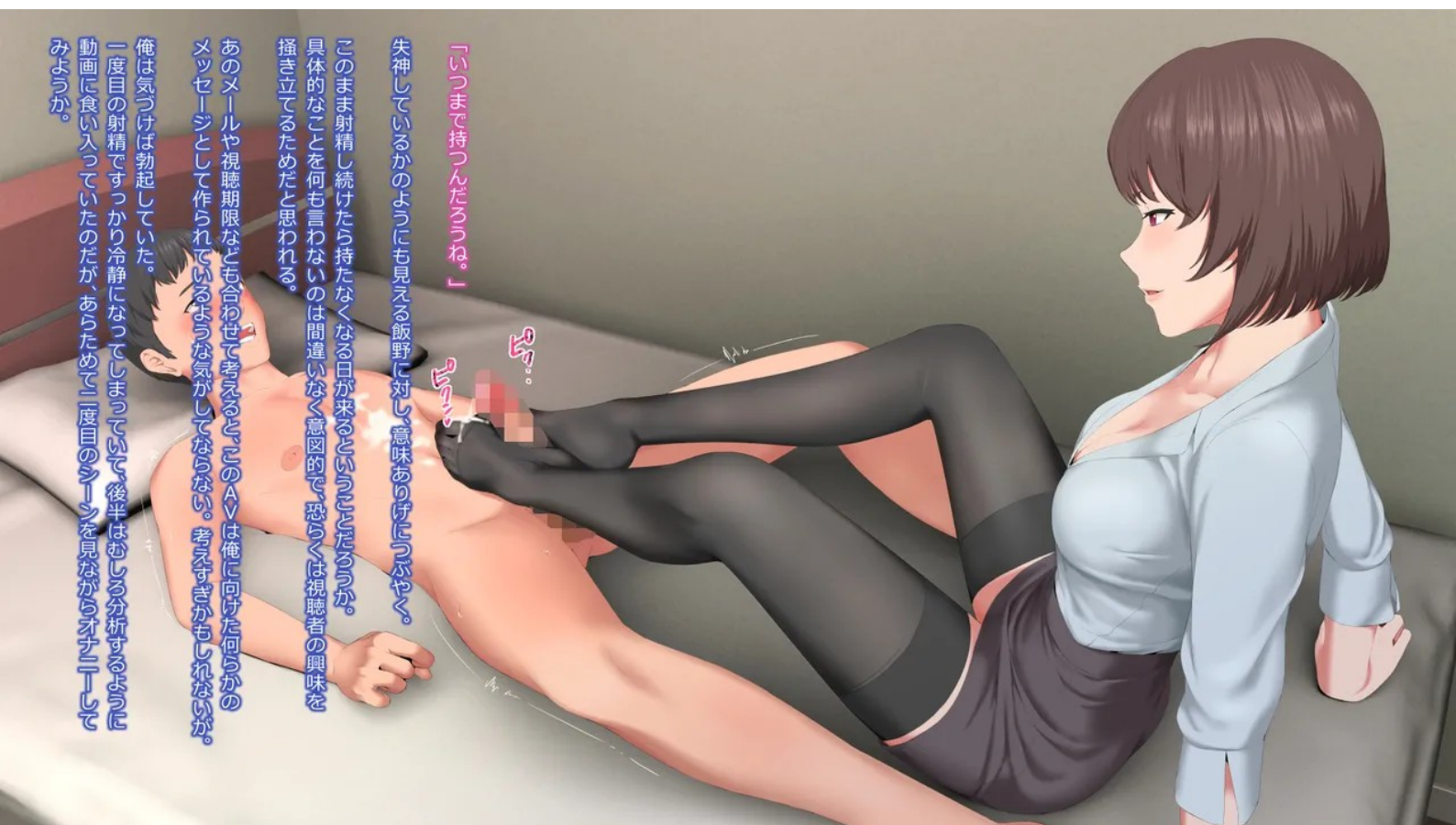
飯野は断続的に呼吸をし、眼球をせわしく動かして、与えられる快楽に悶絶する。

それも一分ほどでだんだんと力を失い、やがて電源が切れたように止まった。

「クスト」

続けて愛梨も足の動きを止めて、満足げに飯野の顔を眺める。





「いっままで持つんだろっね。」

失神しているかのようにも見える飯野に対し、意味ありげにツギやく。

このまま射精し続けたら持たなくなる日が来るというところだろうか。
具体的なことを何も言わないのは間違いないが、恐らくは視聴者の興味を
掻き立てるためだと思う。

あのメールや視聴期限なども合わせて考えると、このAVは俺に向けた何らかの
メッセージとして作られているような気がしてならない。考えすぎかもしれないが、

俺は気づけば勃起していた。

一度目の射精ですっかり冷静になってしまっていて、後半はむしろ分析するように
動画に食い入っていたのだが、あらためて二度目のシーンを見ながらオナニーして
みようか。

今回も一週間で配信が停止されてしまいかもしれない。
だから俺は、さらに頻繁に動画を見るようになった。

動画内で行われているような洗脳を日常的に受けている飯野の姿を想像し、自分を重ねてペニスを抜く。そのたびに愛梨にハマっていくのを感じながら、直接会いたい。責め立てられ、理性を奪われ、気絶するほどの射精をさせられたい。

叶わない欲求をため込んで、さらに堪らなくなって、また動画を再生する。やがて俺は、AVが送られてきた意味をこんなふう考えるようになった。

愛梨たち制作者は、次の〈素人M男〉を探しているのではないか。

飯野に候補者を選ばせ、勧誘のためにメールを送信しているのかもしれない。

となると気になるのは、候補者がどれだけのいるのかということだ。

メールアドレスは〈関係者の皆様へ〉。対象が俺一人とは考えづらい。

俺は会社で飯野だけでなくその周囲にも注意を向けるようになった。

疑ってみると誰もが疑わしく見えてしまうもので、結局、確証はなにも得られていないが、

そんな中、飯野から声をかけられた。

最初は仕事に集中出来ていないことを咎められるのかと思ったがそうではなく、
とある作業を手伝えという命令だった。

重要なデータを扱う際には二人一組での相互チェックが義務付けられている。

サーバーームなどはこの体制でなければ入室すら認められない。

要するに、こうした作業のチェック役を任せられたわけだ。

だが彼はいざ作業場に入ると、俺に退室するよう命じた。

作業許可を得るために俺の名を使い、本来チェックが必要な作業を一人でするといつことだから、もちろん不正だ。

当然、俺も断るべきだったが出来なかった。

殆ど直感的に、愛梨が彼を洗脳し何かをさせているのではないかと思ったからだ。
そして、俺はそれに巻き込まれようとしているのだと。

ならばあのメールは俺だけに送られてきているのかもしれない。

愛梨はいずれ俺を呼び、飯野と同じような洗脳を施すつもりかもしれない。

逆にここで飯野を止めれば、続きのAVすら届かなくなるかもしれない。

結果的に三日連続で、飯野は同様の不正を繰り返し、俺はそれを黙認した。

作業場のドアの前で他に人が入らないよう見張っている間、
不安と背徳感に押しつぶされそうになりながら。

そして一週間が経ち、また新たなAVのURLが送られてくる。

タイトルは——「素人M男の洗脳 逆レイプと命令編」だった。

タイトルのあと映し出されたのはベッドに寝た全裸の男性の体だった。

首から下しか映っていないが、恐ろしく飯野であることは間違いない。荒い呼吸音とともに映像がわずかに上下しているのは、彼が顔の前でカメラを構えているからだと思われる。いわゆる、主観映像とらっやっだ。

相変わらず閑散とした部屋に一人放置されているような印象を受ける出だし。それがしばらく続くことで、この先の展開を何通りも推測させられてしまう。これまでの二本と比べて、AV的演出が強化されているように感じた。

飯野は既に興奮していて、待ちきれないというふうに関全身を小さく蠢かせている。さらにマツ性が強化されている印象を抱けるが、やはり繰り返し洗脳が施されている成果なのだろうか。

職場では、少なくとも表面上はこれまで通り誠実かつ厳格に振る舞っている。その裏で何度も犯され、言いなりにされ、今まで尽くしてきた会社を裏切るような行為をさせられているのだとしたら……。

俺の全身が熱くなっている。まともにものを考えられないほどに。

一気に服を脱ぎ、椅子のリクライニングを最大まで倒して、飯野と自分の状態を出来る限り近づける。映像が主観になっているので、画面に集中したときの臨場感はこちらまでの比ではなかった。飯野の心情も、より鮮明に理解できる気がした。

今か今かと、状況の進展を待つ。上下する胸の中で心臓が激しく暴れている。命令されて構えているカメラだけは出来るだけ動かさないようにしなければ。

そして、ガチャリとドアが開く音がする。

画面ごと震える全身。カメラマイクの間近で漏れる吐息。

途方もない歓喜の雰囲気。だが、やはり恐怖の感情も大きくなっていく。

快感によってマトモでなくなってしまう予感。抗えない絶望と諦め。なによりもすでに戻れなくなってしまうことへの後悔。

画面の裏の表情は見えないから、もちろんだこれは俺の想像に過ぎない。ただ確かなのは、飯野が単純に悦んでいるわけではないということだ。

俺は本当に、こんなものに憧れを感じていいのだろうか。漠然とした恐怖は俺の中にもある。だんだんと大きくなってきている。

だけど、飯野と同じように……。

既に本能がどうしようもなく、求めてしまっているのだ。

数秒の後、画面に入ってきたのは愛梨だけではなかった。

もう一人の女性。飯野がカメラを持っていることを考えると前回までの撮影者か。長髪で目が垂れていて唇が少し厚い。身長も低めで全体としておっとりとした印象。AV女優というよりはテレビタレントでもやっているような感じがする。

急いでAVの商品ページを確認。

出演者の欄には〈愛梨／アヤ〉とあった。

両者とも主演扱いのようで、パッケージ画像にも二人が並んでいる。

対比すると美人系とかかわいい系ではつきり色がわかるのも特徴的だろうか。



動画に戻ると、二人は寄り添っていた。

ベッドの向こうでカメラに向かって挑発的な笑みを浮かべながら。

今回の動画はとてもコンセプトが分かりやすい。

彼女たちがカメラ視線を多用することで、視聴者はあたかも自分が犯されるような感覚を味わえるというわけだ。

AVには割とよくある構成だが、あえてこう動線することもできる。

今作は逆レイプを追体験させることで、次の〈素人M男〉候補により強力な憧れを抱かせることを目的にしているのではないかと。

「じゃあ、始めよつかり」 クスクスと笑いながら愛梨が言った。

本当に自分に向けて言われたような気がして、俺は背筋がゾクゾクした。

時折こちらへ挑発的な視線を送りながら、二人はお互いの服を脱がし合い始めた。最初から責められることを期待していた俺は、焦らされるような気分になる。

少しずつ肌を露出させながら、同時に愛梨がアヤの体をまさぐる。足を絡ませて、セックスを前に互いの性感を高める男女のような情緒で。

「フフ♥扱いちゃダメですからね。」

完全に勃起したペニスを見ながらのアヤの言葉。
まどろっこしいような甘い声と敬語も、愛梨とは対照的だった。



アヤの小さな喘ぎ交じりの吐息と衣擦れの音の中、二人は裸になっていく。それだけで強制的に性感が高まってしまふ俺を、視線だけで犯して笑いながら。

「んっ♥ そんなに見られると、感じちゃいますよぉ♪ ん、あ♥」

アヤは感じやすいらしく、すでに濡れているのがここからでも分かった。まずは彼女に犯されるのかなと勝手に予想して、どんどん興奮が増していく。

二人が脱ぎ終わるころには、俺はもう完全に入り込んでしまっていた。

『待っていますよ、今準備していますから♡』

媚びるようなゆっくりとした声なのに、口調はどこか高圧的に感じられる。こなれた振る舞いは、彼女も飯野の洗脳に関わっている証拠だろう。

『今日こそ我慢できるかな？ そのぞろ本当に危ないから…ねっ』

愛梨が続け止んで笑う。飯野が体をすくませるように轟く。基本的な状況は変わらない。彼は射精を強く恐れているが、抵抗は許されていない。だから我慢しきることなど不可能で、最後には必ず無様な射精を迎える。

彼は、勝敗のわかりきったこのゲームが嫌で、怖くて、待ち遠しくへてたまりない。今、俺はその感覚を完全に共有しているような気がする。まるで自分の身に直接ふりかかる災厄のような感覚がしている。



やがて、アヤの陰部をまさぐっていた愛梨の指が止まった。そして、二人はこちらに体を向け、ゆっくりと近づいてくる。

「お待たせしました。 たっぷり、楽しませてあげますね♡」

飯野が平静を保てなくなるほど昂ったのが、急にカメラがぶれた。
わずかに印象の異なる滑らかな肢体が左右からそれぞれに絡まり、スリスリと首を
立ててこそすれ合う。それだけで痙攣が止まらなくなり、何度もヘニススが跳ねる。

「今日は何もしゃべっちゃダメだよ？」と、左から愛梨。

「言わなくても、ゼーンぶ私たちがしてあげますから」と、右からアヤ。

「アナタはただしっかりカメラを構えていればいいの。わかった？」

言われてすぐに視界が安定する。

代わりに余裕のない吐息が聞こえ始めたが
俺も同様に呼吸を乱しているのであまり気にならない。

「んんん」

「それから、イクときは命令してあげるから、それまで我慢だよ」と

「頑張ってくださいね♥ クスクス」

ただ、肌と肌を擦り合わせているだけ。俺はそれを見ているだけなはずなのに。
全身がビリビリと鳥肌をたてて快感を脳に送り付けてくる。精神力が急速に蝕まれ、
したくもない身もたえが映像の中の肉体とリンクしていく。

愛梨がそっと入ニスに触れ、優しく愛撫し始める。

「方でアヤは右の乳首に口をつけながら、自身の股間に手を当てて自慰を始める。

「ふっ——ふっ——」と、呼吸を異常に荒げながら飯野は快感に抗う。

今回は我慢しろと言われたが、言われなくとも彼は全力で我慢するだろう。

そうせざるを得ないよう彼女たちに仕向けられてくる。

「あーあ、オチンチン震えちゃうわ。涙も止まらないねえ。苦しいかな♡」

頻繁に扱くスピードを変えてくるのは、恐ろしく絶頂感をコントロールするため。

限界に追い込んで責め続けることで、彼の理性を崩壊させようとしているのだらう。

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

「ん——ふっふっ、体もあついくなっぴがやっつてますね♡ 乳首もピンピン♡」

その上でアヤが淡々と乳首を舐り、なごに余裕を削り取っていく。

飯野は耐えるしかないから耐えようとしているが、実際は耐えさせられているだけ。結局はいつも通り、何もかも彼女たちの手のひらの上だ。

「イキたいね。イキたいイキたい。イキたくて仕方ない。とーってもイキたい。」

愛梨が、ペニスをから手を離して飯野の左乳首を触りながら嘔き始める。
これまでと違い、徹底的に我慢させる方針のようだ。これはこれで地獄。

飯野は愛梨の嘔きに合わせて、まるで絶頂しているかのように激しく身悶えする。
アアの乳首責めも激しくなり、さらに全身を痙攣させて反応を大きくして行く。

手口で射精感を高めた上で、乳首責めと言葉でそれを何倍にも増幅させる。
射精してはいけない状況を作りながら射精欲を掻き立て、危機感と満たされない
切なさで混乱させて湧かす。そっやって徐々に、頭と心を無防備にして行く。

んんん
んんん

「私の命令は絶対。従うのは悦び。私なしじゃ生きていけないの。逆に入らないの。」

そこに、致命的な暗示を吹き込む。これはまさに快感による洗脳だ。

「キモチイのは、私に、従っているから。従うことが、一番キモチイことなの。」

んんん
んんん

飯野の反応はいよいよ狂気じみていく。ただこつこつと命令された通りカメラを構え、
黙って射精を我慢し続けていることが、何よりも気持ちいいと言っかのようだ。



またヘニスを手をそっと這わせ、愛梨はかなりゆっくりとしたペースで抜く。
これ以上、少しでも刺激を強くすれば限界を超えることを分かっているのだらう。
カヌラマイクは飯野が函ぎしりしなからすすり泣く音を拾っている。

これまでの二本のAVを見ながら、俺は何度もオナーした。飯野に自分を重ね、
必死に射精を我慢する。本物の限界に近づくと快感は増幅していき、
それでも耐え続けるのは本当に、気が狂ってしまふそのようになるほど気持ちいい。

繰り返したおかげで俺はより長く我慢できるよりになり、得られる苦痛も快感も
大きくなった。だが直に責められている飯野はなにより上を知っている。

「イッていいの？ダメなんでしょう？じゃあ我慢しまっ、もうちょっとだけかあ」

「んふ♡もっと気持ちよくなっただらさ♡♡♡もっと苦しんでほしい♡♡♡」

二人はその地獄で容赦なく飯野を追い立てている。その片鱗を少しでも味わいたくて
本当に本当のギリギリまで俺は絶頂感を高め続けた。



「さあ、覚悟はいいですかあ……？」

飯野のペニスを「コンドーム」を被せて跨り、その先端に局部を擦りつけながらアヤは言った。嗜虐的な笑みを浮かべながら、焦りすように、恐怖をおおるように。

命令に従って喋らず、カメラも動かさないようにしているらしいが、それでも僅かな吐息や画面の揺れから、飯野が激しく首を左右に振っていることがうかがえる。

愛梨がそれを笑顔でじっと見つめ、カメラに顔を寄せて囁く。

「じゃあ改めて命令してあげるよ」

イクな。——絶対に逆らっちゃダメだからね♡」

射精寸前でじつくり弄はれてからの挿入。どう見ても限界なのに、それでも我慢し続けると命令されながら追い詰められる。無慈悲に、手加減もなく。

「はーん、お前も……♡♡♡」

「死ぬ気で我慢して見せて？ 応援してあげるから♡」



「~~~~~」

一気に腰が落ちてきて、飯野は呻きを漏らさずにはいられなかった。最初は腰と腰を擦り合わせるようなクラインドから休む間もなくアヤは動き始める。最初は腰と腰を擦り合わせるようなクラインドから

「ん——ア、ハア、臍内でビクビク、しちゃってますね♡ フフッ」

アヤと愛梨には明確に違う点がある。

アヤは嗜好として楽しみ、激しく悶える飯野の姿に興奮しているように見える。一方で愛梨はこれまでの二本を見ても一貫して冷静な態度を崩していない。

「我慢だよ、カ・マン♡ ほのほの頑張ってる」

こうして快感漬けにするのも洗脳して何らかの目的に利用するためのなのだろう。恐らくはその効率化のためにセーリストであるアヤに協力を頼んだのではないか。

性欲と打算。両極端な原理に基づいた責めは、だからこそ本能と理性を同時に焼き尽くす。その相乗効果に、俺も気づけば追いつめられてしまっていた。



見計らったように、アヤが腰を上下に振り始める。
ジーンと反応を観察しながら、紅潮した頬で妖しい笑顔を作って。

肉と肉の激しい衝突音がリズムよく響く。かなりのテンポで延々と。
飯野はよく耐えている。前回までの感じだったら、もう果てていてもおかしくない。

「ダメよ。我慢しないで。もっと必死になれるでしょ。」

愛梨は耳元で囁き続けている。

もしこの命令によって、彼が何度も敗北してきた快楽に打ち勝つことが出来ているの
だとしたらそれは肉体が精神を超えて彼女に服従していることになりほしくないか。

「んっ、んっ、アハ、すこいすねえ、フランクアハハ」

パン

パン

パン

パン

パン

アヤも驚いている様子。同時に嗜虐性を刺激されてさらに腰ふりを激しくする。
息も弾んで笑い声の混じった喘ぎが大きくなっている。

「それだよ、歯を食いしばって、全身に力を入れて、そう、HAAAAA」

パン

まともな思考力が残っているはずもない。飯野は必死に言いなりになって耐える。

「はあくあ……イカせられませんでしたね、残念♥」

アヤが笑顔で言いつつ腰を浮かせた。解放されたペニスは落ち着きなく小さなピクつきを繰り返し、これまでの責めの壮絶さを物語っている。

「いつもなら確実にイッてたのに、命令されると限界を超えられるんですね、体が勝手に従っちゃっやう？ フアッ、じゃあもう、絶対に逆らえませんか♥」

言い聞かせるようなアヤの言葉に、愛梨が相槌をうつ。

「わかるよね。もう洗脳が完了しちゃったってことだよ。」

「アナタはね、何よりも私たちの命令を優先するようになったの。」

それは彼にとって、そしてこのAVシリーズにとって重要な意味を持つ。

予感して、ペニスの痙攣が大きくなる。つられるように全身がガクガクと震えだす。

「ねえ？ 《我慢》の逆を命令され続けちゃったら——アナタ、終わりたい♥」

突きつけるように言いつつ、愛梨はアヤと視線を交わして笑いあふ。

平静を保てず揺れる画面の中で、彼女たちはゆっくりと体勢を変えていった。



命令されれば意思とは関係なく肉体が従い、限界すら超えられる。
だから彼は今までの何倍も絶望する。無慈悲に抵抗を封じられる展開を確信して。
だから彼は今までの何倍も期待する。限界を超えてイキ狂わされる自分を想像して。

愛梨が跨ってそのまま腰を落とす。刺激を最小限にするように時間をかけて、
彼の絶望と期待を長引かせて、その心により衝撃的な一撃を加えるために。

「……ああ、覚悟はSSSだ」

アヤが挿入時に言ったのと同様のセリフ。だが、意味するところは真逆だ。
問うたのは我慢する覚悟ではなく射精させられる覚悟。これは、処刑宣言に等しい。

飯野は答えられない。だが、それはあくまで理性の反応だ。

「……クスト、ね、膣内でビクビクが止まらなくなってるよ」

愛梨が見下ろして笑っている。隣でアヤも笑っている。
飯野だけじゃない。俺も、今までの何倍も興奮している。
男の精神を徹底的に破壊する彼女たちの意図を明確に感じて。



「始めるね♥」

先程のアヤとのセックスをなぞるように、最初は下半身を擦り合わせるような大きなグラインドから。飯野も腰を左右にくねらせて快感を逃がそうとする。

が、宣言通り今度は「命令」の内容が違う。

アヤ♥

アヤ♥

アヤ♥

アヤ♥

「動いちゃダメよ。」動きを止めた飯野に対してさらに「カも抜いて。」

見透かされたように抵抗の手段を封じられていく。

そのたびに荒くなっていく鼻息が、膨れ上がり続ける焦燥感を表現する。

「…あーあ、男の人なのに泣いちゃって♪ そんなに嬉しいんですねえ♪」

アヤは恍惚としている。どれだけ無様に拒んでも、ただ彼女たちを喜ばせるだけ。そして、やはり躊躇もなく、驚くほど簡単に決定的な命令が下される。

「じゃあ、好きなだけイキなさい♥ 好きなようにね♥」

精神的にはもうとっくに限界を超えている。解放されれば即爆発するのは当然だ。動かずに観察している愛梨の下で、飯野はのたつように痙攣し始め、そして――

恐らく飯野はまだ絶頂し続けている。
腰を打ち付けられる度に全身を強張らせ、食いしほつた歯から漏れる激しい呼吸で「ヒィ、ヒィ」と鳴いている。尋常な反応ではない。



「快感に溺れて射精しまへっすやあ、おかしくなっすやあっ、ねっ」
愛梨は優しい口調になっている。命令に上手に従えたことを褒め、狂つていく姿を肯定し、もっともっとと堕ちてを促すケリウチだ。

飯野に合わせて射精したはずの俺のペニスも全く萎える気配がない。
またすぐに射精できそうな感覚すらあるのは、こじばらくこのシリーズでオナニーを繰り返してきたからだろっか。

そういう意味では、俺も愛梨に調教されてきたことになるかもしれない。
でも、ならばなおさらもの足りない。出来るなら直接して欲しい。
犯されて洗脳されて隷属させられたい。飯野の様に必死に抵抗して嘲笑われたい。

知らず、手の動きが速くなる。もっ興奮が抑えられない。
二人の目が俺を観察している。俺に語り掛けてくれている。
会いたい——会いたい、会いたい、会いたい、会いたい。

「アケケ♥ 命令だよ？ 嬉しいでしょ♪ だからほら、イケ♥」

「イキ続けちゃえ、イキまくっちゃえ♪ マツチンホ壊れちゃえ♥ アハハ♪」

二人で矢継ぎ早に言葉責めが繰り返されるようになる。いつの間にか、接合部から白い粘液が漏れ出している。その量だけを見ても、何度も射精していることがうかがい知れる。

射精する度に何かが失われていくルールは変わらない。きつと飯野は途方もない絶望に襲われているだろう。それでも、命令されれば射精しなければならない。

「アナタは何でもできる。私の命令があればイキ続けることだってできる。だからアナタは今日から、すごい勢いで終わりに近づいていくんだよ♥」

異常な痙攣を続ける姿からは絶頂のタイミングがわからない。だが、飯野の反応は一段また一段と絶望に染まっていき、狂気に支配されていく。奪われ続けながら犯される快樂に、理性まで完全に焼き払われてしまったように。

「ねえ、どうしちゃったの？ 笑い声が漏れてきちゃったねえ♪
連続オモラン気持ち良すぎてオカシクなっちゃったのかなあ〜♪」

愛梨は激しく腰を振りながらも、余裕を全く崩さずに挑発し続ける。

「うんうん、幸せですね〜、ハカになっちゃいますね〜
もっともっとイキましょっね♡♡ もっともっと狂いましょっね♡♡」

アヤは愉しそうに言葉をかけながら、自分の陰部に手を伸ばし興奮を高めている。

「次イッたら交代ですかね？ 私もイケちゃってたくさん命令してあげますよ♡」

おもちやで遊ぶような態度の二人。彼女たちは全く手を緩める様子がない。
しばらくしてまた飯野が大きく跳ね、今度はマイクでもちゃんと拾えるくらいの
声量で笑い始める。その声は確実に、正気を失っているように聞こえた。

例えば、射精のたびに意識が乗っ取られていくとしたら、と考える。
脳内で別の声が響き、体が勝手に動き、自分はそれを自覚しながら消えていく。

もしかしたら今の飯野のような反応になるかもしれない。
自我が崩壊していくのを止められずに認識し続けるのは、ある意味、死よりもよほど
怖い。何度射精させられても必死に抵抗し、無駄な我慢もするだろう。

もちろん、そんな現象は本来ファンタジーでしか成り立たない。
だが、彼女たちなら現実に来るかもしれないと思ってしまう。

そもそも、飯野の異様な恐れようにも現実感がない。それこそ魔法じみた洗脳としか
説明できないような現実離れた事象が、AVの中では展開されているのだ。

だとしたら、彼女たちは何のためにそんな魔法を行使しているのか。
それを俺に見せることに一体どんな意味があるのか。

俺には三度の射精が限界だった。

動画はそれ以降も続き、その中で飯野は数えきれないほど絶頂させられていた。

最後まで画面から目を離せないまま。

俺は考えても答えの出ないことを延々と考え続けていた。

翌日、会社で驚くべきことが起きた。俺の部署にアヤがやってきたのだ。

飯野は新入社員が入ったと彼女のことを部署内に紹介し、自身の隣席に配置した。

あのAVはやはり、この会社と関係している。もう疑いようがない。

その日から二人は頻繁に連れ立って消える。もしかしたら社内でも同様のプレイが行われているのかと妄想すると正直、仕事にも手がつかなくなった。

ただ同僚たちは皆、特に気にしていない様子だった。

やはり巻き込まれているのは俺だけなのかもしれない。

そしてそのまま数日が経ち、事態はまた急転する。

社内で最もセクリエイの激しいデパートムに入ることになったのだ。

名目は障害対応。作業実施者は俺と飯野。作業期間は数週間を予定。

障害があると言い出したのは飯野だが、その詳細は俺にも説明してくれなかった。

さらに彼は入室が認められる苦のないアヤを連れてきて、自分が作業をしている間、通常業務を教えてやってくれと俺に命令したのだった。

つまり飯野は顧客情報などの機密を簡単に抜き出せる部屋で、

誰のチェックも受けぬまま数週間にも渡り作業をするわけである。

会社にとって致命的な不正を行うと宣言しているにも等しい。

俺の葛藤の日々が始まった。

朝、一度だけいつものオフィスに顔を出し、すぐに三人でデパートムへ向かう。

他に誰もいない空間で飯野が操作端末に向かい、俺とアヤは離れて片隅の机に移動。

そこで延々、社是だの報連相だの、基本の基本について説明させられ続ける。

アヤはAVの中と同じように挑発的に笑い、時おり体を密着させてくる。

だんだんとこちらの説明も聞かなくなり、自分のペースで雑談を始める。

内容は性生活の話や明け透けに、M男が好きだとか、どんなプレイをするかとか。

かと思えば、急に飯野を連れて退室し三十分ほど何かをして戻ってきたり。

アヤはひたすら妄想を掻き立てるだけで、俺に手を出しては来ない。

溜まりに溜まった劣情を吐き出すため、家では寝る間も惜しんでAVを見続ける。

飯野の不正を誰かに報告し、止めさせなければならぬ。

時が経つことに危機感は膨れ上がるが、歪んだ欲求がまともな思考を妨げ続ける。

一週間後、前回のAVが削除されると状況はさらに悪化する。

最悪だったのは、これまでのようにすぐに次のメールが送られてこなかったこと。

他のSM系を見ても全く興奮できず、性欲がどんどん溜まっていく。

自然と仕事中にアヤから話される内容をオカズに自慰するしかなかった。

見透かしたように、アヤはより具体的にプレイの内容を語るようになり

「先輩も責められてみたいですか？」などと、期待を煽るような言葉も混ぜ始める。性欲をコントロールされている感覚に、俺はだんだんと逆らえなくなっていく。

飯野が唐突に障害の復旧を宣言したのは、三週間後だった。

その頃には俺は、完全にアヤの話の内容を妄想することの虜になり、一日に何度もデータルームを抜け出してオナニーする異常な精神状態に追いやられていた。AVが見れないことや不正に加担していることへのストレスからの逃避でもあった。

だがそれもこの日で終わり。

通常業務に戻りアヤに密着されながら囁かれることも無くなった。

と同時に、次のAV「素人M男の洗脳 洗脳完了編」が送られてきたのである。

待ちに待ったそれは、冒頭から、繰り返した妄想を上回る刺激的な内容だった。

「射精させてください」

全裸の飯野が、愛梨の足元で土下座をしている。

「射精させてください、射精させてください……」

苦しそうな声で、時おり呻きながら何度も繰り返す。

言わされているのではなく、自らの意思で懇願しているように見える。

愛梨は飯野を見下ろして、あの優しい表情で言う。

「……ご奴隷のしつお願い……」

ビクリと飯野の全身が震えた。

今回アヤは撮影係らしく、カメラマイクの近くで聞き慣れた笑い声を漏らしている。

飯野は少し悩んだ後で、おもむろに頭を床につける。全身が紅潮しているのは、屈辱感と興奮によるもの。

そして、画面を見ながら俺は悟っていた。見づらさが股間に装着されているのは貞操帯。飯野は射精管理をされていると思われる。

とすると、だ。会社でアヤと一緒に席を外していた間、彼は何をされていたのか。

四六時中、傍で監視され続け、トイレや会議室に呼び出されては性欲を刺激され、だが射精はさせてもらえず、悶々としたまま命令に従って不正行為を続ける。

地獄のような、甘い日々。

その前提が今回のサブタイトルでもある「洗脳完了」ということだろう。愛梨は彼を「奴隷」と言った。彼はもう、手遅れなのかもしれない。

「射精させてくださいっ！」

より悲壮な声で飯野は繰り返す。

とれだけ笑われようが、撮影された動画を部下に晒されていようが。



「やっとう、自分からおねだりするようになってしまったね♡」

懇願の内容が完全に逆転していると、愛梨は言う。

「もう射精したくないって泣いて頼むから貞操帯をしてあげたの……」

「もう……もう耐えられせんっ…… 頭が、もうおかしくなりそうですっ……」

飯野は額を床にこすり付けながら首を振る。かなり切迫した様子。

必死で抵抗して守っていたものを自ら差し出すことに、何の躊躇も感じられない。

前の動画からこれまでの間、一体何をされていたのか。

会社では、不審な作業を行っていたものの、様子はそれほどおかしくなかった。いや、俺もアヤに意識を奪われっぱなしになっていたから自信はないが。

とまあ、その裏で飯野は急速に蝕まれていたことになる。

「自分の言葉を曲げるんだからもっと真剣にお願いしてくれなごうね♡ 私を楽しませてくれたら、喜んであげる♡」



言葉を受けて、飯野は鼻息を荒げながらしばらく固まる。
そして何かを決意したように唾を呑むと、今度は尻を高く上げた。

隠れていた貞操帯の全体が映し出される。排せつ用に開けられた先端の穴からは粘液が糸を引き、固定用のリングに持ち上げられた陰囊が窮屈そうに収縮している。

「お願いします…っ！ お願いします…っ！」

無様な懇願に、即座にアヤが笑い声を返し、次いで愛梨が嘲笑の表情を向ける。
飯野は全身を震わせながら、それでも繰り返した。

自分で考えて行動させられるのは、ただ命令に従うよりもひどい屈辱感に襲われる。
さらに彼はそれを撮影されている。誰に見られているのかも知っているに違いない。

だが、それだけフライドが傷つこうが、社内でもんな目で見られることになるのが、
快楽を求めずにはいられない。それほど隷属と射精の欲求が凄まじいのだろう。

愛梨はすべてを理解している。だからこそ。

「クス…それだけ？」

——この瞬間に最も効果のある言葉を吐き出せる。



残酷な反応に飯野は切なそうに呻く。

「が、予想もしていたらしく、すぐに高く上げた尻を左右に揺らし始めた。

興奮の色を増した吐息と小さな喘ぎ。そこに加わる一人の女性の嘲笑。

三人の声を先導するメトロノームのように、カチカチと貞操帯の金具が鳴る。

「フフフ、すごくいいよ。ほら、言葉でも丁寧におネダリしてみて？」

満足げな愛梨に促され、飯野は慎重に言葉を選び撃いていく。

フムフム♡

フムフム♡

フムフム♡

フムフム♡

「『ご主人様、奴隷からのお願い、です…。何でも…どんな命令にも従います。だから、射精させてください…。もう限界です。…どうか、お願いします。』」

自分と相手の立場を明確にし、願いを聞いてもらう代わりに何をするか宣言し、改めて懇願の内容を回し、慈悲を乞い、最後に頭を床にすりつける。

静かで滑稽だが、だからこそ真剣であることが痛いほど伝わった。

彼はすべてを捧げてほしいと思っている。彼女たちに心酔しているのだ。

会社での不審な行動も、二人の為だったのだらうと、疑念が確信に変わった。

「いいよ」 じゃあ、たくさん命令して、射精させてあげるね♥
愛梨は優しい声色で言った。

この分かりやすい切り替えが、本能を溶かす。
褒めて気持ちよくしてくれるから、何をされても従ってしまう。

毒はムチよりアメに仕込まれる。
それは決して拒めない甘い味がするものなのだ。



「ほら、犬みたいにもっと激しく尻尾を振ってごらん？」

早速の命令に歓喜するように、飯野は即座に従った。
右へ左へ、腰を大きく振ることで、ペニスに激しく暴れる。痛そうにも見えるが、彼の全身から伝わってくるのは抑えきれない悦びだけだ。

「一月、人はここまで変わるのか。人をここまで変えることができるのか。
そして、そんな異常に憧れを抱かせ惹きつけるこのAVはなんなのか。
俺は勃起させたペニスを扱いていいのかも判断できぬまま、打ちひしがれるように
呆然と画面を見つめている。

「よくできました。じゃあ、顔を上げて？」

言われた通り、飯野は上体を上げて膝立ちになった。愛梨もそれに身を寄せるように少し前かがみになり、二人は同じくらいの目線の高さで見つめ合う格好になる。

「見てあげるから、今日は自分でしなさい。自分で言い出した射精管理を自分のワカヤマで解くんだけそれですわね。」

これまでの経緯を見れば、飯野が自分の意思で射精管理を依頼したとは考えにくい。きつと愛梨が誘導したのだろう。こんな結末になることを見越して。



「はい…はいっ！ すみませんでしたっ。自分でオナニーしますっ…！」

飯野は何度も頷き、貞操帯を被せられたペニスを持ち上げてアピールする。はやく抜きたいと。泣きそうになりながら縋りつくような視線で。

「フイコア はい。鍵、外していいよ！」

愛梨は微笑んだまま、背後から小さな力手を取り出し目の前にかざす。

飯野はありがたがるように両手でそれを受け取ると、手間取りながら鍵を外した。完全に冷静さを失っていて、まごちない手つきだった。

「クスッ、じゃあ、オナニーかなさ。」

命令を待つて、飯野はすぐにペニスを抜き始めた。緩んだ表情と理性のかけらもない手つき。射精管理によって相当、追い詰められていたことがうかがえる。

「最初がのびるな」激しくため息を吐く。

バカにするように「LSDの？」と訊く愛梨にさらに興奮を高められて、射精への恐怖もどこへやらリズムをつけて高速で自らを導いていく。



「うんうん♡ 自分の気持ちに素直になれて偉いね♪」

落ち着いた調子で笑う愛梨を見つめながら、声も出さずに喘いで必死に抜く。見開いた目には涙を溜めて。恍惚。この瞬間のためにこそ生きているかのような。

「フフッ」 もう抵抗の意思がまったく消え去っちゃった♡ よかったね♡」

優しい口調の絶望的な言葉に体を震わせ、飯野は熱のこもった吐息を吐いた。先走りの量が急が増え、彼の手元から垂れ落ちる。抜く音にも水気が増した。リズムが不規則に崩れ、腰や膝がカクカクと痙攣し始める。限界間近の雰囲気。

高まっていく射精感と膨大な幸福感が画面を通して伝わってくる。

そして絶妙なタイミング。愛梨は飯野の顔に手を添え、じっと目を見て言った。

「今日みたいなのは特別。これからは私がちゃんと管理するからね。もう射精を懇願することも許さない。イヤと言われたときだけイクの。SS」

完全な射精管理。愛梨の気分を損ねれば永遠に欲求が解消されることではなく、愛梨が命じればとだけ恐れながらも即座に射精しなければならぬ。

「SS—— はっ—」

土下座までした男が、待ちに待った瞬間を前に拒否できるはずがない。異常な興奮。隷属の契約を意味する問いかけに何度も同意を返しながら、そのたびに手の動きがギアをあげ、やがて最高速に到達する。

「SS」 じゃあイヤでもいいよ♥ でも、私にかけないでね。」

その反応には欠片も愛がない。飯野は己の全てを差し出したのにもかかわらず、それでも彼は歓喜していた。正気など既に失っている。

ブルブルと身を震わせ、そしてその最高の快感の中で彼はあっけなく射精した。



愛梨はそれを笑顔で見つめ続ける。

「あ、あ、あ……」

精神までも放出するように、脱力し破顔して長い声を上げながら。彼が得たものは何もなく、ただ全てを奪われただけなのに、恍惚として。もう力が入らないのか、膝がガクガクと震え上半身が揺れている。射精管理の成果が精液の量はすさまじく、小便のように放出され続けた。



他のどんなAVでも見たことがないような異常な射精だった。

飯野はただオナニーをしただけ。なのに同じ姿勢で抜き同じタイミングで射精しても彼の感覚を1%も体感できた気がしない。

羨ましい。妬ましい。狂おしい。

なぜ、飯野だけがあんな目に合えるのか。なぜ、あそこにいるのが俺ではないのか。

もう耐えられない。我慢が出来ない。

言っでやる。明日会社に行ったら、アヤに主下座でもなんでもして。

俺も二人の奴隷にして欲しいと。洗脳し調教して欲しいと。すべて奪って欲しいと。

長い長い射精が終わると、愛梨は飯野の体に手を伸ばして触れた。乳首をつまみクリクリと弄びながら、彼の余韻を長引かせるように。

「手を止せなよなっ」

半萎えのようになっていたペニスをピクリと反応させて、飯野は顔く。彼の射精は管理されている。出せと言われれば出せなければならぬ。揉むように刺激を再開し、落ち着ききかない呼吸をまた荒くしていく。



「焦らなくて大丈夫だよ。ゆっくりたくさん気持ちよくなるからね。」

優しい言葉の裏にはつきり見える、射精を何度もさせようという意図。抵抗する術がなくなっても何かが損なわれる事実が消えるわけじゃないのだから。だから恐ろしい。だから本当は逃げたい。だから、被虐の快感が膨れ上がる。

「もう手遅れだから、せむ私に委ねちゃおう。わっ」

甘く乳首に刺激を与え続けながら、愛梨は彼の心情を上手に操作していく。言いなりになるしかないのだと、それがとても気持ちいいのだと思い込ませる。

飯野のペニスはすぐに固く大きくなった。

「フフフ、これでまた、イケちゃうわね」

彼は背徳に飢えていて、それを満たす一番の餌は絶望なのだ。愛梨はそれを理解していて、適切な表情で適切な言葉をかけることができる。圧倒的な支配者の才覚。人を見極める観察力と、確実に墮とす実現力。それは、他の誰にもない彼女の魅力だ。

女優の特性を引き出して魅せるのがAVだとすれば、このシリーズは完璧にその役目を果たしていることになる。



「クスクス」後悔してる？ でも、この先にはたくさん幸せが待ってるんだよ」

男を魅了し、壊し、言いなりにして、搾取する。楽しそうに、優しい笑顔で、その姿に改めて魅入られて、俺のペニスも簡単に復活してしまっていた。

そう。ターゲットは飯野だけじゃなく。

AVの視聴者である俺も、既に虜になった「コントロール」されてしまってる。

自覚すると危機感を覚える。もちろんそれこそ、彼女の術中なのだろうが。

飯野が本格的に扱き始めると、愛梨はまた彼の顔に手を添えた。そして視線を固定して目を見つめながらゆっくりと言葉をかけていく。

「気持ちいい、幸せ」

飯野は身を震わせながらオナニーを続けることで質問への答えとする。どこか切なげな表情で小さな吐息を漏らしつつ、全身に鳥肌をたてて。

「うん、良かったね、もう私にされることはせーんが幸せだよね♡」

言葉を掛けられるたび、天国にでもいるような恍惚とした表情になっていく。崇拜の対象に見つめられるのが嬉しくて仕方ないといったふうだ。

洗脳の完了。俺は今、それを見ているのだ。

人が人を完全に壊してしまう瞬間。なのに愛梨は平然としていて穏やかで。背筋にツクツクと悪寒が走るくらい、その光景は神聖だった。

「飯野、うんちがさっぴい。」

やがて愛梨が言うと、一旦、画面が真っ暗になった。



「準備はいい？」

数秒の沈黙の後で、唐突に耳元で声がした。場面転換。二人は体制を変え、先ほどのソファーに並んで身を預けていた。

飯野はペニスを握っているが、その耳元には小さな黒い物体が張り付けられている。そこからコードが伸びていることから、すぐにそれがマイクであることがわかる。愛梨は飯野に密着しつつそのマイクに口を寄せて、吐息交じりに言った。

「じゃあ、また再開する？」

ダイレクトに伝わってくる感覚。本当に耳元で囁かれているような。視線も飯野ではなくカメラに——俺に向けられている。瞬時に理解してペニスを抜き始める。全身に幸福感が駆け巡る。

「それさ、おトコ手。」

俺を見て、俺に囁いてくれている。ただ飯野が犯される様を見て抜くのはまるで違う。頭の中で血が沸騰するような不思議な声。すべて委ねて任せてしまいたくなる。逆らいたくない。



「今日はたくさん射精できそうだね♪ だけど…」

クスクスと意味ありげに愛梨が笑う。それだけで画面内の空気が一気に変わる。

「あと何回かで」

「になっちゃうんだっただよね♥」

重要な発言だったはずなのに、不自然に音が途切れて俺は戸惑う。

愛梨はすっとカメラ目線のまま笑っている。こちらを挑発するようだ。

明確な意図を持ったカット。俺が一番知りたがっている部分をあえて隠している。

「>>になつて、何もかも終わっちゃうんだっただよね♥」

気になる。気になり過ぎる。

このシリーズの最初から提示されている謎。射精の対価は何なのか、何を奪われれば彼のように快楽に溺れることが出来るのか。そしてその何かは、俺も同じように搾取され得るものなのか。

飯野は恐怖の対象を改めて意識させられて明らかに興奮し始めた。

忌避感。しかし自分ではもう手を止められぬ。逆りうたが出来ぬ。

その状況が背徳的でたまらない。敗北感が気持ち良くて仕方ないやんやん。

「でも大丈夫♪ 私がついてるよ♥」

言いながら、愛梨は飯野の手に自らの手を優しく添えた。恐怖による震えを抑えるように。決して逃がさないと拘束するように。

「<が消えて、>もなくなると、<が< なくなると、>が<」

私だけは傍にいてあげる。私が気持ちよく<続けてあげる。ね、>」

「<」

穴だらけの言葉責め。俺には予想もつかないその内容はしかし、どれも飯野にとって致命的な意味を持つらしい。画面内の肢体は二気に汗はみ、震えが止まらなくなっていく。

「私がいれば、>でも幸せでしょう? 私のためなら、>でいいよ!」

アナタもこうなりたいでしょう? ———と悪魔の微笑みは俺に問いかけている。悪寒が止まらない背筋。全身の熱が、頭へ上り脳を溶かし始める。

「<」

「フフ♪ 幸せそう♥ 幸せそうよ!」

飯野の反応が狂気を孕んでいくのは見えてわかる。「一方で俺はじりじり。自分の状態を自分で把握できないほど、愛梨の視線に囚われているのは確かだが。」

「カウントに合わせて射精することだけ考えればいいからね？ よんよん」

飯野は涙を流し細く鳴き始める。手で淡々と、的確にペニスを追い詰めながら。まだ弱々しく抵抗を続ける精神と、それを裏切って容赦なく絶頂に向かう肉体。愛梨が撫でるように、添えた手を優しく動かしつつカウントを進める。

「ざーん 葛藤が伝わってくるよ。どっちが勝つかなあ。ぶぶ」



虚ろな目で苦しみながらしたくないことを強制的にさせられる。そんな光景。まるで漫画やアニメのチープな催眠シーン。滑稽で、必死で、それゆえに悲壮。

「にーい、ほら見て貰おうね、アナタの最後♥ キモチイ終わりの瞬間」

嘔き声が脳をくすぐる。直接、自分が狂わされているような確かな錯覚。人が壊される瞬間。これまでの価値観が消えて新しい何かになる。洗脳の完了。

「いち♥ イイよね。これでアナタは」

そして、よどみなくカウントは進み。

最後のカウントと同時に、飯野は完璧なタイミングでその瞬間を迎えた。

「クスクス、セロ♥ はーい、ビュッビュッ、ビュッ、ビュッ~~~~」

全身を力ませて射精が始まる。初弾、第二弾と画面外へ飛び出るような勢い。

「~~~~あっ……あっ……あ……っ……あ……っ……」

その感覚に耐えきれず、食いしばった歯の奥から甲高い声が断続的に。



「アハハハ♥ アハハ♥ 可愛いSEXING。さっはっ気持ちよくなNONO。」

促され、精液を送り出す脈動を全身で繰り返す。何度も、何度も。その動作も、漏れ出続ける声も、完全に正気を失ってしまっている。

そんな画面内の出来事を見ながら俺は、「一気に現実を引き戻されるのを感じていた。今までトレースし続け、実際に自分が洗脳を受けている錯覚にすら陥っていたにもかかわらず、今はそれが遠くの非現実のように思える。」

結局、俺にとってこれはAVに過ぎないのだ。

どれだけ性癖を歪められても、女優に対して崇拜に近い感情を抱いてしまったとしても、こっぴどく見ているだけならば、俺は足掻いても他人事ではかな。

「気持ちよかったね♥ 幸せだね♥」

飯野の手をゆっくり動かしてペニスを愛撫させながら、愛梨が囁く。
相変わらずこちうに視線を向けて。

理解している。これは誘いだ。俺の側から一歩踏み込まなければ、画面中の光景を俺にとつての現実に出ることは出来ない。彼女は言っているのだ。

タイミングを合わせて俺も自分のペニスを撫でてみる。
ゾクゾクと快感が肌を這い上がり、全身を甘く痙攣させていく。

もう耐えられない。この疼きに明確な意味が与えられない現状が。
必死で抵抗する理由を与えて欲しい。その掌の上で、滑稽に躍らせて欲しい。
何度も絶望とともに凄まじい快感を与え、理性を溶かし壊して狂わせてほしい。

理解している。これは誘いだ。術中にもう完全にはまってしまうのは嫌だ。

飯野は意思を無くしたように、機械的にペニスを扱き続ける。
虚ろな目、時おり小さく跳ねる体、紅潮し汗ばんだ全身。
その姿にもう一度自分を重ねながら、俺は俺の行く末を想像しなわけていた。



それから三日後の入社直後に、職場を騒然とさせる出来事があった。社長名義、全社員宛のメール。内容は、社内機密に関わる不正発覚の報。加えて、全社用PCの調査と二部社員への聴取が行われるという通達だった。

文面から察するに犯人には目星がついていない様子だが、まず間違いなく飯野がやってきたことがバレ始めたのだらう。

メールを受け、当人は平然と部下たちに調査へ協力するようにと指示を出した。俺は気が気じゃなかったが、その日はそれだけでは済まなかった。

飯野の隣に座るアヤが頻繁に視線を向けてきたからだ。一日中ずっと。妖しい笑顔で挑発するように。

耐えきれず彼女を会議室に呼び出したのは夕方になってから。

もともと飯野がされたような洗脳を味わわせて欲しいと頼むつもりだったが、これは好機だと考えた。協力を申し出れば仲間に加えてくれるかもしれないと。

しかし切り出したのはアヤの方。彼女は俺の隣に座り、体を密着させて言った。

「AVに出演させてあげるから、飯野課長の罪を被ってくれない？」と。

普通に考えれば呑める話ではない。会社をクビになるのはもちろん、不正の規模によつては人生が終わりかねない。その対価がAV出演だなんて釣り合はずが、ない。

だけど、その時俺の脳内ではAVの映像がフラッシュバックしていた。

興奮と混乱を処理しきれず、ただペニスを勃起させることしかできなかった。

そんな俺を、アヤはクスクスと笑いながら見ていた。

自分たちの不正がバレかけているにもかかわらず焦った様子は全くなかった。

もしかしたらこうなることは計算済みで、俺にAVを送っていたのもいざという時にこうして飯野の身代わりにするためだったのかもしれない。

数日ゆっくり考えてもいいと言われ、俺は何も答えられないまま帰宅した。

AVにハマりきっている俺の状態は看破されている。考えれば考えるほど断れなくなることを見抜いているから時間を与えたのだらう。

そして彼女たちはやはり、どうすれば俺がより堕ちやすくなるのかも理解していた。

部屋に戻った直後にメールが送られてくる。

件名は「マン男優の、関係者の皆様へ」。本文は一行のURLのみ。

5本目のAVのタイトルは「素人M男の洗脳 奴隷の生活編」

前回、完全に堕ちた飯野はその後どうなってしまったのか。

つまり、ここで俺が彼女たちの誘惑に乗れば最終的にどうなってしまうのか。

罠であることは気づきながら、しかし、見ない選択肢はなかった。

映し出された飯野は、痴女もののAVに出演するM男優そのもの。犬のような体勢でアヤに奉仕し、愛梨に股間を責められている。自由意思はなく、指示に従い、快感に身をくねらせるだけ。これまでの抵抗心は欠片も感じられない。

「再生しちゃったんだね」と、愛梨が俺にむけて言った。

三人が映っていることから、今回は固定カメラで撮影していると思われる。

「今日は、この」の幸せな毎田について紹介してあげる。」

俺は直感している。これを見続けるのは危険だと気づくのを。ただでさえ洗脳を受けてくたさないと、こんなふうには直接俺をターゲットにして誘惑されたら、歯止めが利かなくなってしまう。

「アナタのなれの果てかも知れないから、きちんと最後まで観るんだよ♡」

牛の乳しぼりのように飯野のペニスを扱きながらほほ笑む愛梨の姿に、脳がしびれるほどの興奮を感じる。近い将来、あの場にいるのは自分かも知れない。想像に実感がこもると、これまでと別種の快感が走り抜ける気がした。

俺は無意識に、下半身に手を伸ばしていた。



「今はね、寝美をあげてるのよなの。」

彼女たちの為に不正を行った報酬というものが。飯野は本当に気持ちよさすぎて、その反応は純粹な悦びに満ちている。

会社に尽くしてきた彼はもういない。価値観を書き換えられ消されてしまった。そう考えるとひどく残酷だが、だからこそ、彼女たちが魅力的にも見えてくる。

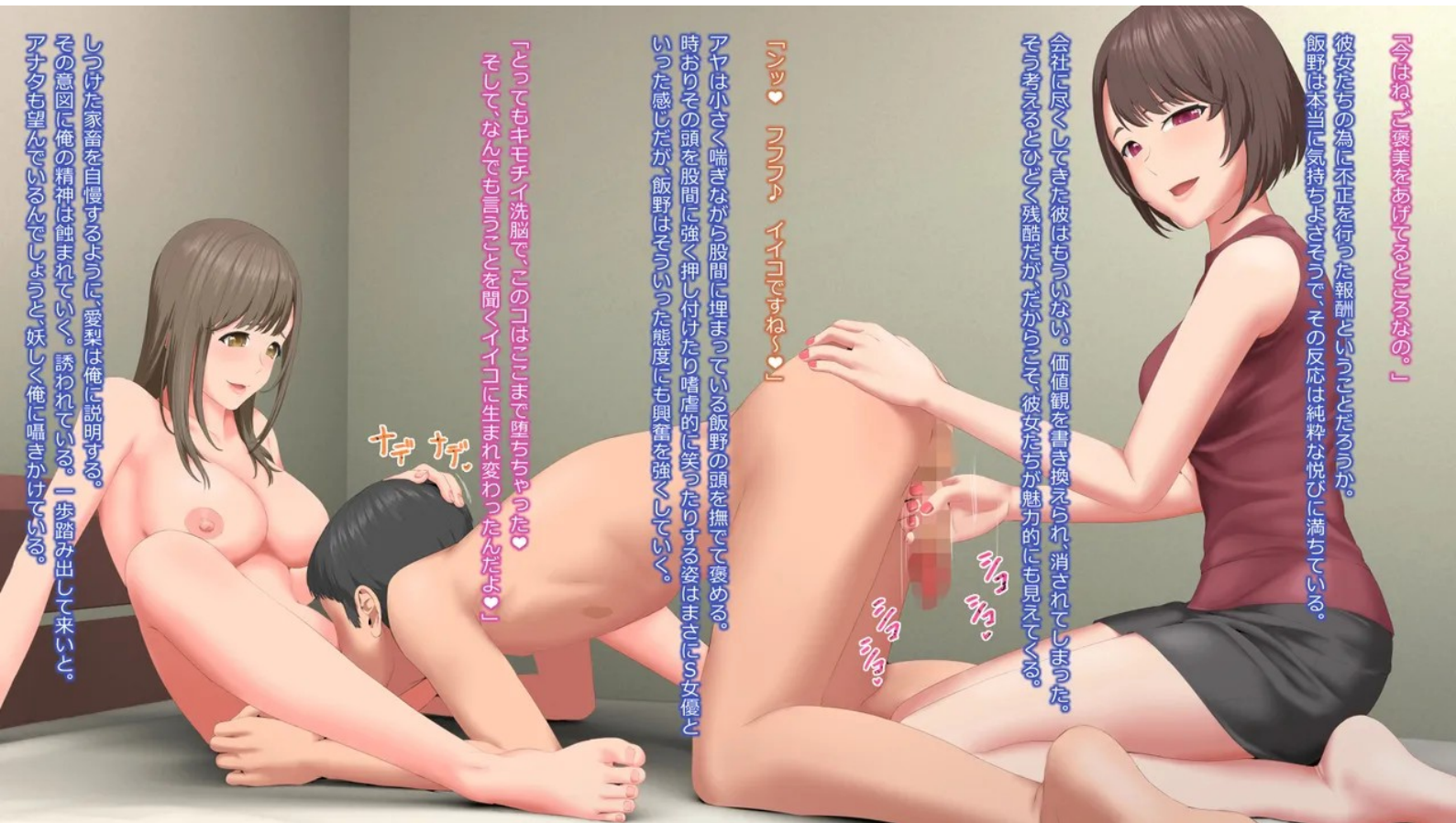
「んん、フッフッ、イイコですわ〜」

アヤは小さく喘ぎながら股間に埋まっている飯野の頭を撫でて寝める。時おりその頭を股間に強く押し付けたり嗜虐的に笑ったりする姿はまさにS女優といった感じだが、飯野はそういった態度にも興奮を強くして行く。

「どっでもキモチイ洗脳で、このコはここまで堕ちちゃった♡
そして、なんでも言っつことを聞くイイコに生まれ変わったんだよ♡」

ナナ ナナ

しつめた家畜を自慢するように、愛梨は俺に説明する。その意図に俺の精神は蝕まれていく。誘われている。一歩踏み出して来いと。アナタも望んでるんじゃないかと、妖しく俺に囁きかけている。



「うん、キレイだね。いいのよ、」寝美なだけ。たくさん感じて。」

夕チユ夕チユと、先端を集中して責める。飯野は切なさな鼻息を繰り返して漏らし、同時にアヤへの奉仕も激しくして行く。M男としての、奴隷としての本能に身を任せるようにして。

「アン♥ そんなにおいしいですかぁ。フッフ私好みのところも覚えられて、偉い偉い♥」

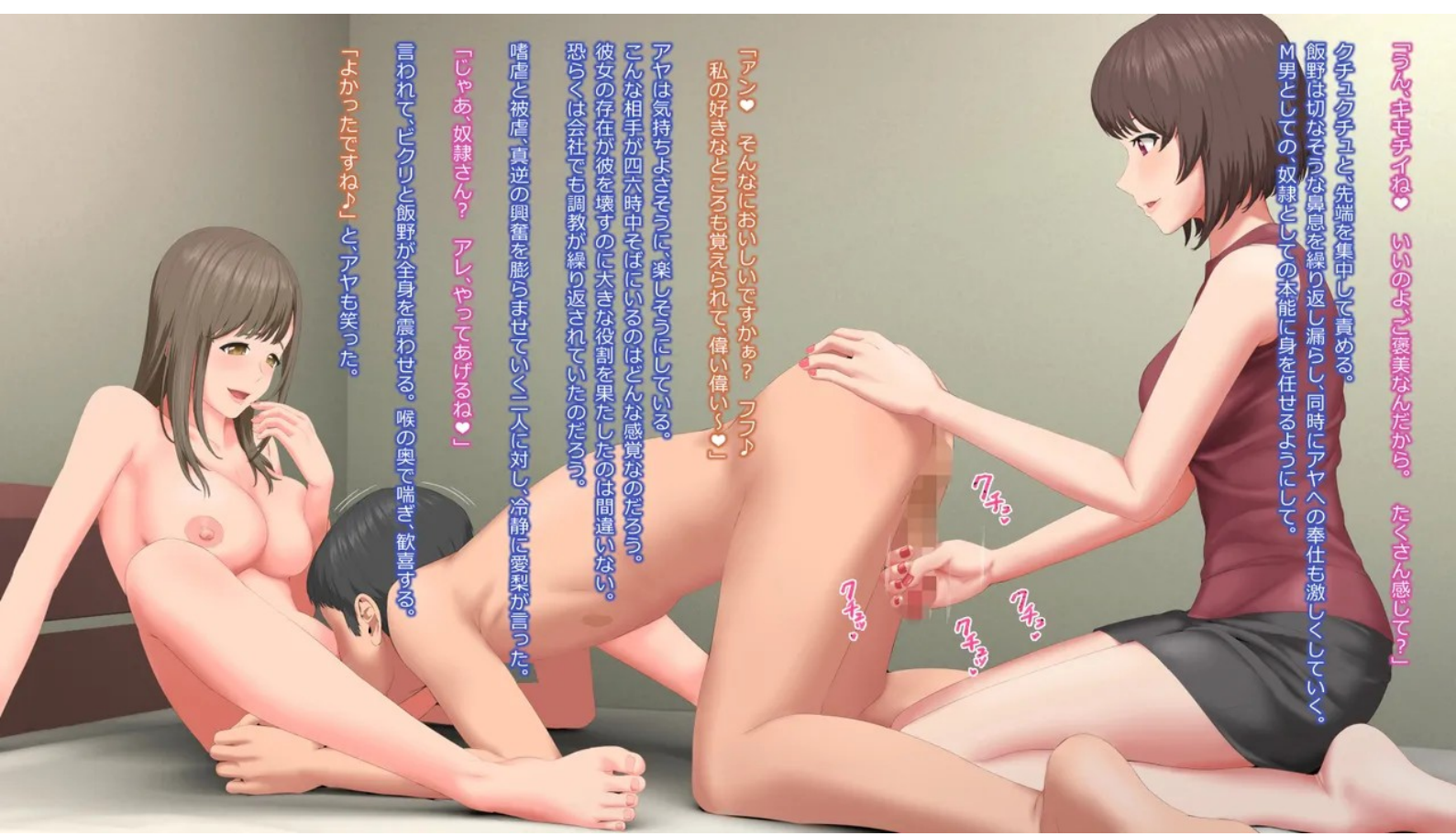
アヤは気持ちよさそうに、楽しんでしまっている。こんな相手が四六時中そばにいるのはどんな感覚なのだろう。彼女の存在が彼を壊すのに大きな役割を果たしたのは間違いない。恐らくは会社でも調教が繰り返されていたのだろう。

嗜虐と被虐、真逆の興奮を膨らませていく二人に対し、冷静に愛梨が言った。

「じゃあ、奴隷さん？ アレ、やってあげるね♥」

言われて、ヒクリと飯野が全身を震わせる。喉の奥で喘ぎ、歓喜する。

「よかったですね」と、アヤも笑った。



さらに今度は飯野のペニスに視線を戻し、そのビクつきを見ながら

「クヌッ、もうイキまっつになつてる♥」

そうつぶやき、また先端責めを執拗に繰り返す。だんだんとスピードをあげて。

「ほりあ……ん、このすもも疎かにしないでくださいわっ」

アヤはアヤで、股間に埋まった頭をさらに強く押し付けて面足で挟み込む。飯野は完全に余裕を奪われ、悶え、もがき、声にならない声をあげた。苦しそうだが、それが堪らないというように腰をビクつかせ、快感に狂っていく。

抵抗もせず、ただなすがままにされている様子はやはりM男優を思わせるが、その反応はどんなAVよりもリアルで、演技などではないことが伝わってくる。これが、快樂漬けにされて壊れた人間の感じ方ということだろうか。

「そのその限界でしょっ、そのまみっつていいよ♥」

愛梨は畜産家が乳を絞るような動きで上から下へリズムをつけて促す。口を塞がれた飯野の声も家畜の鳴き声のように響き、そして、最後まで抵抗もせず





「アハ、そんなに良かったですか？　じゃあ、ちゃんと私もイカせて下さいね♡」

未だに余韻に震えている飯野の頭を優しく撫で、アヤはクニニを促す。それに応じて、くニれまでより激しい水音が響きます。

「一方で、愛梨は飯野のアナルを優しく揉みほぐしながら、こちらに微笑みを向けた。

「アナタもイケた？　自分がこうなるのを想像しながら射精できた？」

言われて、ソクリとした快感とともに我に返り、意識を画面から離す。床が広く汚れている。ティッシュで受け止めることもせずにまき散らしたりして。

普段と比べても信じられないくらいいのめり込んでいた。殆ど無意識のオナニー。ただ、飯野の感覚を少しでも味わいたい一心で。

「自分の気持ち、そろそろ自覚出来たんじゃない？」

映像だとわかっていても脳が錯覚する。直接話しかけられていることに緊張と興奮と期待とが無限に膨らんでいき、喉が渇く。軽い眩暈がする。

危機感が膨らんでいくのに、裏腹に胸の奥は甘く疼いていく。

ナギナギ

チキチキ

チキチキ

チキチキ

チキチキ

「SSSだわ♡ Mの♡も幸せそうだしよっ。アナタも幸せになりたいよねっ。」

醜態をさらしながらも必死に奉仕しているのは、幸せだから。
尽くしてきた会社を裏切って不正に手を染めるのも、幸せだから。
すべてを投げつけてしまえるほどの幸せを、今、飯野は享受しているのだ。

「あん…♡ ああっ♡ フンッ あん…♡」

無我夢中の飯野に刺激されたのか、アヤの悦ぶ声が大きくなりだす。

「ねえ、私たちに幸せにして欲しくないの？ ほら、よく考えてみて♡」

本能を揺さぶる嬌声と理性を濁らす誘惑が、俺の思考を強制的に導く。
飯野の罪を被れば、彼と同じ洗脳を受けられる。彼のように幸せになれる。

「あっ…♡♡♡ ああ！ ああっ♡♡♡ あんっ♡♡♡ あっっ♡♡♡

画面の中でアヤがさらに乱れる。自ら快感を求め、絶頂に向かっていく。
その姿に意識を囚われて、考えなければならぬことが何も考えられなく。
そんな俺を、愛梨が怪しげな微笑みとともに見つめている。



「んっ……うあ、あうあ…… ああああ」

アヤの体が大きく跳ねた。仮にも同僚。毎日の様に顔を合わせている女性。今日、会議室で密着してきた肌の柔らかさや匂いが、鮮明に思い出される。触れながら、嗅ぎながら「心不亂に奉仕出来たらどれだけ興奮するだろうか。



「うんっんっ 上手にイカせてあげられたね♥ えらいよ♥」

寝めるように愛梨が前立腺を強く押し込むと、飯野も全身を強張らせてガクガクと震え始める。ゆっくり繰り返されて、途切れることなく何度も。ペニスの先端からはトロリとした液体が止めどなく吐き出されて糸を引く。

「ドライオーガズムって言うんだけど、知ってる？ 射精を伴わない絶頂♥ 性的興奮が高まっている状態だと、こらやってずーっとイキ続けられるの♥」

しばらく飯野は震え続ける。全身を真っ赤にして、恍惚とした吐息を漏らして。大きすぎる快感に体の制御を失って悶え狂っているような反応だった。

アッ、アッ



それはつまり、責められるだけがマツの悦びじゃないことも示している。愛梨が言った通り、アヤに奉仕することで性的興奮が限界まで高まっていたからこそこれだけ長く激しいドライオーガズムを迎えることが出来たのだらう。

「フエッ♡ まっ♡ふっ♡」 「褒美なんだから、イヤまっ♡っていいんだろ♡」

飯野の背後から、絶頂を増幅させるように嘯きつつ前立腺を責め続ける愛梨。

彼女は洗脳と調教により、彼を奴隷にした。だが、不幸にしたわけではない。新たな快感を教え、優先順位を書き換え、彼にとっての幸せの意味を変えた。その成果がこれだ。二人はきつと俺のことも幸せにしてくれるに違いない。俺が今の価値観を捨て、身を任せる覚悟さえすれば。

「頭ハカになっちゃって？ 狂っちゃって？ せーんが捨てちゃおっ♡」

「私たちがさえいばいじゃないよ？ それでシアフセですよわ？」

愛梨はペニスへの刺激も加えて、飯野の快感を際限なく煽る。

アヤはその快感に没頭できるように、彼の頭を撫でて落ち着かせる。

「おっ♡ おっ♡」

無限の絶頂。「イケ」とどちらかが言ったたびに体を激しく震わせて短く叫ぶ。そんな光景が少なくとも15分ほど続き、飯野が殆ど動けなくなった頃、愛梨が言う。

「今日は特別に、もっともっと褒めてあげるわ♡」



そこから始まったのは甘い甘い、甘い責め。毒沼に沈めるような快樂漬け。

愛梨は脱力する飯野を胸の辺りで抱きかかえ、上から微笑みかける。

「もう力入らないね。大丈夫だよ、私たちに任せてね♥」

アヤは彼の足の間の床に座り、ペニスを豊富な乳房で挟みながら顔を見上げる。

「いいですか？ 柔らかくて気持ちいい？ いっぱい感じてくださいね♥」



恐らく、二人はまだまだ飯野を利用し続けるつもりでいるのだろう。

彼を徹底的に籠絡しようという意図が、その態度に表れているのを感じた。

褒め、あやし、望む以上の快樂をひたすらに与え骨抜きにしていく。

ペットを可愛がり、逃げる意思を削ぎ、自立的思考を塗りつぶすように。

男の性を急速にダメにしてしまう何か。

唆し、プレイドを自ら放棄させて、引き裂かせる。

そんな、トス黒い儀式が始まるようにしている予感がする。

「ちゃんと撮影してるから、たくさん見て貰おうね。」と、愛梨。

飯野に語り掛けてはいるが、それは実質的に俺へのメッセージだ。
——「よく見ている」と。

飯野はごく小さく頷く。目は焦点が合っておらず、表情も蕩けた笑顔。
先程のドライオーガズムによって完全に気をおかしくしてしまったのかもしれない。

「もっと甘ませて下さいね♡ 頭カラっぽにして、ね？ クスト」

アヤはクニのお返しとばかりに、激しく胸を上下させる。



射精からしばらく経ったことで飯野のペニスには完全に復活していたが、体力の方は回復していかないようで、悶えることもせずにはた身を任せている。
頻りに瞬きし、切なそうな表情と弛緩した笑顔とを交互に切り替えながら。

「もう気持ちいいこと以外わからなくなっちゃった。フフフ」

「じゃあ、そのまま言いなりになってほしいよ。ほら、口を開けて」

見上げてくる彼の顔を見つめ返し、愛梨はほほ笑む。

そして、言われたとおりに口を開ける彼に合わせ、自らも口を開く。

すぼめた唇から唾液が垂れ、まっすぐ、わずかに糸を引きながら落ちていく。落ちていき、直下に構えられた回の中へ吸い込まれる。二滴、三滴と。

飯野は口を開けたまま味わうようにしばらく溜め、やがて喉だけ動かして飲み下す。荒い鼻息の音が響く。プルプルと肩や腹のあたりが震えている。

その反応は、唾液が報酬として機能していることを明確に示していた。

そのルーティンをもう一度。

全体を映した引きの構図のなかで、時間が止まったように開かれた二つの口の間を、光を反射して白い線となった透明が何度も落ちていく。

そのたび二人の笑みに、それぞれ違う色合いが濃くなっていく。

邪悪な優しさを滲えたドス暗い紫と、恍惚に狂ったピンクイエローに。



唾液の対価として人生の全てを捧げさせられる関係性。

そこにある崇拜と快楽の多寡を、正確に推し量ることが俺には出来ない。だが少なくとも、唾責めがこれほど官能的に映ったのは初めてだった。

「もう一回っ」

愛梨がほほ笑みながら訊く。

飯野は震えながら何度も頷いた。

「オクススト オチンチン、ビクビクしてる♥」

落ちてくる唾液を受け止めながら幸福に浸る飯野を見つづ、アヤはペニスを挟む胸の動きを少しずつ速くしていた。

上から下から。女性に優しく責め蕩かされ、ただ幸福そうに身を任せる。与えられるまま、無条件に無抵抗に、どんな毒であろうとも受け入れる。それこそが射精によって何かを失い続けた結果として彼が辿り着いた最高の快樂で、彼女たちにとっては最初から目指していた洗脳の完成形ということだろう。

「…あーあ♪ だらしない姿さらしちゃって♥」

「いいんだよそれで。 ほら、あーん♥ 私のオクスストでダメになっちゃおうね♥」

だが改めて、あの上司がここまで肺抜けにされてしまっていることが不可解だ。優秀で、きつと頭も良くて、何よりも仕事を優先していた彼が、いったい何をされれば短期間にここまでの変貌を遂げられるのか。いったいどんな魔法を使えば。

— 知りたい。知って、味わって、堕とされて、実感とともに理解したい。



「ん♥ おいしかった？」

やがてそう問いかげられると飯野はゆっくり深く頷いた。愛梨は甘やかすように微笑みかけて続ける。

「そっ、良かったね♪ でも切ないお顔になってる嘛っ。もうイヤそりなのっ。」

相変わらずアヤはリスミカルに胸を揺らし続けている。相手の反応を見ながら責め立てる様は熟練的確。絶頂感の「ハントロール」について知り尽くしている。

「明日からまた頑張れるように、いっぱい気持ちよくなるからね。」

イクことを肯定されて、飯野は静かに上り詰めていく。じっと見つめてくる愛梨の優しい視線と見つめ合い、表情を綻ばせながら。

「いいよ♥ 幸せなお漏りしていいよ♥ 我慢しないでね。」

言葉をかけられる度に全身が弛緩していく。そしてそのままゆっくりと――

「イクっ。イクね、イクっさっさっさっ。はーん♥ 『ハントロール』」



染み出すような、静かな射精が始まる。
アヤは一目動きを止めてそれを胸の上で受け止める。

ビクビクと力なく全身を跳ねさせながらさらに恍惚として脱力していく飯野を
微笑みとともに見守りながら、二人は幸福感を高める暗示をかけていく。

「最高……最高だね♡ もう他に何もいらない。この幸せだけあればいい♡
私ただけがいい♡ それだけでこんなに幸せ。こんなに気持ちいい♡」

「戻ってきてくれますよね？ 愛してくれますよね？ 捧げてくださいよね？
ご褒美のためになんでもしてくれますよね？……ねえ？」



〈奴隷の生活編〉からはこれまでと真逆の印象を受ける。
あくまで優しく、奪って失わせることよりも、与えて植え付けることが主題だった。

このシリーズの流れは、一部のマゾにとって理想的な物語を構成している。
甘い匂いに惹きつけられ、手遅れになってから必死に逃げようとするも失敗する。
何度も挫折を繰り返す、最終的には何もかも失って隷属させられる。
そして、その末にすべてが受け入れられ、すべてを満たしてくれる世界が待っている。

理想的で分かりやすいから、嫌でも自分の進む道として想像してしまう。

いつのまにか、またゆっくりとバイブりが再開されていた。

射精こそ終えているものの、飯野のへニスは未だに脈動を続けている。
アヤの胸の谷間から先端が少しだけ覗き、また精液まみれの奥に呑み込まれていく。
毒々しい快樂の沼でもがく飯野を象徴するような光景が画面の一部で繰り返される。

「もう、逃げられないからね。」

その言葉は、飯野に向けられたものとしては今更過ぎる。

俺は自分がもつ囚われてしまったのだというのを、この瞬間に深く思い知った。



沼に嵌められてもがいているのは、むしろ俺の方で。

なのに、その状況に途方もない悦びを感じてしまっている。

——動画は、そこで終わった。

俺はじぼろへ目を離すことが出来なかった。

昨日に続き、連日のメールだった。ただし、題名が少しだけ違う。

「マソ男優の、候補者の皆様へ。」

完全に随とじにかかる意図を感じ、殆どパニックになった。

俺以外にも候補者がいるのか。

ならば早く決めないとその座を奪われてしまうのではないか。

焦りに背中を押されるようにすぐにURLをクリックし、AVを購入した。

《素人M男の洗脳》 奴隷のなりのかた編》 ずばりなタイトルにソクソクしながら。

映し出されたのは愛梨だけだった。これまでよりも露出の多い、扇情的な格好。

上下とも下着が見えそうな危うい角度で撮影されている。



「今日は、どうやったら奴隷になれるのか教えてあげる。」

「知りたかったですよ？」と、愛梨はビデオチャットのように語りかけてきた。

「ただ命令に従えばいいだけじゃない。すべてを捧げてこそその奴隷なの。」

だから、奴隷は奴隷であることを幸せだと思つてなまよふな。」

飯野は幸せそうだった。あれだけ抵抗していても射精を迎えると「変じて歓喜する。」
そして進行することに、幸福の比率が増していき彼を支配していったように思える。

「私の洗脳は、背徳的な幸せの味を教え込んであげるもの。幸せは拒めない。そして二度でも味わうと、あとは勝手にのめり込んでいつっちゃう危険な麻薬よ」

たった「服。それで男に人生を捧げさせるには十分だと愛梨は言う。

飯野を見てきたらうと。誰だって同じように壊すことが出来るのだと。

愛梨と画面越しに見つめ合いながら、脳裏にはこれまでのAVの内容がフラッシュバックしている。高鳴る心音。落ち着かない呼吸。

「今日はアナタにも体験して貰おうと思うの。あくまでも体験だけだね」

そのうえで、本格的な洗脳を受けるかどうかはアナタ次第♡……と♡」

愛梨が目を細めて挑発的に笑い、それだけで俺は瞬きすら封じられる。

「まあ、余程の変態さんじゃなければ、視聴をやめることをお勧めするよ」

画面越しでも十分、逃げられなくなる可能性はあるからね♡」

動画なのに心情を見透かされ「コントロール」されていく感覚。意識が誘導されていく。

「……さあ、覚悟が決まったなら、私の指示に従ってオナニーしようね」

愛梨の視線が画面の下方に向けられる。椅子に座っている俺の股間を見るように。

「フゥ、もう準備万端じゃない♡——ほら、まずはゆ〜ん。」

同時にカメラがわずかに揺れた。どうやらカメラマンは飯野らしい。恐らくは床に膝立ちになって片手にカメラを持ちつつ、指示通りにペニスを握ったのだろう。

最近の動画では、飯野は初めから全裸で登場する。だから俺も必ず全裸で視聴するようになっている。彼の姿により深く自分を重ねるために。

「ねえ♪ 私たちのAVで、今まで何回オナニーしたの？」

視線を戻して、嘲笑交じりに聞いてくる。

愛梨もまた飯野を介して俺を見ている。それが伝わり、興奮がどっしりともなぐ高まっていく。夢にまで見た。彼女が、俺を主体として扱ってくれる時間。

「ほらほら、焦らないの♡ 気持ちよくなりたいたらちゃんと従って？」

飯野の動きを追い越して本能のままに動き始めた手を、タイミングよく制される。あの優しい気な表情を直接向けられて、脳が甘く緩む。

「うんうん、そうだよ、最初はゆっくり。」

上手に従えたりまじり気持ちよくなるように導いてあげるから。ほっ♡」

スカートの裾を掴み、持ち上げると下着が露わになる。AV的、ありきたりな演出。なのに、見入つていいか狼狽してしまうほど臨場感がある。

「アハハ、ねえねえ、視線が私の顔とパンツを行ったり来たりしてるよ。もっとじっくり見て？。せっかく見せてあげてるんだから♡」

会ったこともない女性に何もかも見抜かれてしまう自分に興奮し、言われるまま凝視し始めてしまう自分にも興奮し、同時に、やるせなくなる。でも止まらない。

「こんなふうに直接話しかけてもらえると思ってなかった？」

とっつても嬉しそうだけど、興奮しすぎてイカないように気を付けてね♡」

コントロールされる被虐的悦び。コントロールを失う背德的快感。

「今日ほっとも素敵なことが起こるんだから、それまで我慢しよう♡」

彼女の言葉に委ね、支配されていく圧倒的幸福感。なんなのだろう、これは。



「すっごい妄想してきたんじょっ。いじらなれやっ(ニヤ)」

知らず、俺は頷いていた。愛梨の「ミニゲーム」を本物にしたくて。

「見つめられて観察されて、命令されて。洗脳されたかったんだよね？」

うん。俺はずっと、飯野のように扱われることに憧れてきた。自分も味わいたいと願ってきた。だからこうして俺を俺として扱ってくれるのが嬉しくて仕方ない。

「手」で我慢崩壊させられちゃったり、素直なキモ子暴かれながらオチンチン踏まれちゃったり、ヘイケンヘイクなっって命令されながら犯されまくっちゃったり、射精管理されたあと嘔吐で完全に壊されちゃったり……妄想してきたんだよね♡」
うん。だから同時に、途方もないもの足りなさも感じる。夢が少しだけ現実になったことで、押し殺してきた欲求が爆発してしまいそうになっている。

「でもごめんね。画面越しだと、これくらいのサービスしかできないんだ♡」

言うので、愛梨は手をスカートから離し、そのまま上部へと持っていく。そして、胸のあたりをおもむろにほだけさせた。

「だから、そんなに恥ずかしがらないで、もっと見ていいんだよ。」

裸になっている動画でも何度もオナニーしているのに、今さら谷間と下着を見せつけられるだけで異常に鼻息を荒げてペニスを何度もビクつかせてしまう。

俺の目を見たり視線を落として手元を見たりして微笑まれるのも、オナニーの仕方や反応を観察されているようでやはり興奮する。

例えば欲求が完全に満たされるわけではないとしても、ここにぶら下がっているのが今までで最高の餌であることに疑いようはない。むしろ、満たされ得ない欲求があるからこそ、ありきたりなオナニーサポートが最高の餌になっているのだろう。彼女はこの餌に食いつけばいずれば奴隷になれると、冒頭にそう言ったのだから。



「そろそろ少しずつスピードをあげようか。でも、いったらダメだよ。彼も射精しないように我慢してたでしょ。あれ、気持ちよさそうだったよね。」

愛梨の言葉は確信に満ちている。

俺が逆らわないこと、のめり込んでいることへの。

「あなたも極限まで射精は我慢♥ そっすればあの洗脳が体験できるからね。」

俺は飯野のようになりたい。この憧れがもう消えないことを彼女は知っている。

「必死で我慢して。でも我慢しきれなくて、最終的にはお漏らししちゃっ
抵抗や我慢が真剣であるほど気持ちいい♡ それこそ、壊れちゃっていい♡」

飯野が与えられてきたもの。俺が欲しくてたまらないもの。
それをもう一度刷り込むように、愛梨は妖しい笑顔で優しく語る。

「ダメなのにそんな射精の虜になってダメなのに求めるようになって、
射精するほど抵抗しなきゃいけない理由、我慢しなきゃいけない理由が増える。
だから射精がどんどん、どんどん♡ 気持ちよくなっていつちゃっ♡
与えてくれる私たちに逆らえなくなっ、逆らえないから我慢できるコネなくなっ♡
中毒化して与えられる快樂なしには生きられなくなっ、全てを捧げてしまっ♡」

それは飯野が堕とされてきた道。
俺がAVを見て、憧れてきた末路。

「アナタも、必死で我慢すればそうなるかもしれないよ♡ クスクスッ」

手が速くなるのを、もう止められる筈がなかった。
必死でペニスを責め、腰をくねらせて必死に耐える。

自分でも何をやっているのか分からない。
だが、この先に求めるものがあると、彼女は言ったのだ。



「ほりゅ」と言い、愛梨は片方の手でさらにスカートとパンツの裾をめぐる。高まる射精感で余裕のない脳はどうとうパニックになる。

「フ、アハハハハハ、顔と胸とパンツ♡どこ見ればいいか分かんなくて目が泳ぎまわってるね、頭おかしくなっちゃったみたい♡」

そう決めつけられて。実際にそうなっていて。全身が快感に汚染されていく。

「悦びで？ 彼もそうやっておかしくなってるっていったんだよ、」

私はね、射精の度にあるものが失われると本気で思い込ませただけ。

それだけで彼は心の底から、全力で射精を我慢するようになったの。

結果、どうなっちゃったのかはアナタも見えてきた通りってワケよ、

愛梨が飯野から奪っていたものは結局何だったのか。

彼女は最後まで明かさならしい。

もし俺が知ることになったら、それは。

「直接会えたら、同じ洗脳をかけてあげるからね♡」

最後に「層」目元を歪ませて。愛梨は俺に微笑みかける。

そしてこちらに向かって迫ってくる。一瞬、画面が暗転した。



「ペースを合わせて？」 はい、シー「ツリッ」

楽しい気な声色とともに虚空を緩やかに上下し始める手。意味を理解すると同時に、俺の体も勝手に動いていた。

「んんん 上手上手」

愛梨は飯野の手元には目を向けず、じつと俺を見ている。ソワリ。頬を舐られたような心地よい鳥肌が走り、心音が大きく速くなる。

絶頂感が臨界点に触れ、股間に思い切り力を込める。それでも手は止めない。愛梨の手が優しく誘導し続けているから、止められない。



「もうハイキそうなの？ 必死なお顔、カワイイよ」

穏やかな嘲笑とともに少しだけ手の動きが速くなる。まずい。もう余計なことを考える余裕がない。

だじすねば追いつめられるのか。だじすねば逆戻りえなくなるのか。知り尽くした言葉、行動。本当に観察されているかのよう的確だ。

飯野の体も強張っている。俺と同様、絶頂しないよう全力で集中しているのだろう。だが、彼は俺よりも愛梨の動きに忠実に、手の動きも完全にトレースしている。

「ほら、もっと強く握りなさいっ！」

だからこの言葉も彼に向けられたものではなく、触れるか触れないかの微妙な抜き方でギリギリ耐えている俺の行動を予測し、牽制しているのだ。

動画のハズなのに、誤魔化しすら通用しない。

言われたとおりに手に力を籠める。止めどないペニスの脈動が限界を訴えている。容赦なく、また二段スピードが上げられて、もうどっしりしようもない。



無理だ。これ以上は無理。

マズい、マズいマズいマズい……

「ホントに終わっちゃってもいいの？」

まだ我慢しようっ。

我慢我慢っ！」

いつかの飯野のように、理性のかけらもない身もたえをする。

だけど気が狂いそうになるだけで、生理的現象を抑え込める展望が全く見えない。

笑いながら責め続ける彼女の姿に、毒々しい悪寒を感じながら。俺は限界を――

——そこで、不意に手が止められた。

俺は即座にペニスから手を離し、体を丸めながら腰回りに全力を籠める。股を閉じて頭を振り、上半身を必死にくねらせて射精感が降りていくのを待つ。

本当に限界だった。ここまでギリギリの寸止めは経験したことがなかった。自分一人では到底不可能な見極めを、彼女は画面越しにやってくれたことになる。頭をほとんど真っ白にししながら、俺はその事実で戦慄していた。

「AVは最初から計画的に作られている。」

まだ余裕を取り戻せていない脳に、愛梨は唐突に説明を始める。



「あなたの反応が手に取るように分かるのは、あなたを調教してきたから♥ AVに合わせていっぱいオナニーしてきたでしょ？ 責められて、我慢して、彼と同じタイミングでイカされて。それを何度も。だからわかるの。あなたがどんなふう感じて、どうすればイキそうになるのか。全部ね々」

要するに、俺はAVによって感じ方や我慢強さを調整されていた…？ そんなことがあるのか。いや、彼女ならあり得る。事実、今の寸止めは的確過ぎた。

中速で手の動きが再開される。

俺についていく以外の選択肢はない。たとえすぐに絶頂感がぶり返したとしても

「この動画の終わりまで耐えきつたら見逃してあげるよ？」

「まあそんなこと、不可能だけどねッ」

クスクス笑いながら、愛梨は言った。このタイミングで、絶望的なセリフを。

圧倒的な周到さ。最初のAVを見た時から、こうなることは決められていた。

興味を持ち、何度も見て、憧れ、オナニーを繰り返して、逃れられなくなる。

知らないうちに精神も肉体も調教され、動画越しに完全に支配されている。

「理解した？　すでにアナタ、私の手のひらの上にいるんだよ」

言葉と手の動きと視線。それだけで巧みに忍耐力と射精感を拮抗させられている。

敗北が確定している勝負。意識して、追い詰められる焦燥感に苛まれる。

堕とされる。壊される。急にそんな実感が沸き上がってきた。

そうか、これが飯野の感じてきた恐怖と、どうしようもなく背徳的な幸福感。

「アナタがもう洗脳に掛かってて、抜け出せないこと」証明されちゃったね♡」

それは、俺にとって衝撃的な言葉だった。

「洗脳に強烈に憧れてるでしょ？　それが洗脳の効果だとは思わなかった？

私に会えば、彼のように大事な何かを奪われるって本気で思ってたでしょ？」

それが何なのか分からないのに、必ず奪われちゃうんだって、狂信的に信じてる。」

確かに。それはおかしい。画面内で起こった魔法のような出来事を、自分にも起こり得るといつの間にか信じ切っていた。正常な判断とは言えないかもしれない。

「今日の最初に言った通り、私の洗脳は一度でも受ければあとは自動で落ちていく。繰り返してAVを見ることで、アナタは勝手に暗示を強化していったよ♡」

だからもう絶対に逃げられない。私に会いたい欲求に絶対に抗えないの。」

言葉がそのまま頭にぶつかってくるような感覚がした。

それに脳を揺さぶられて、一気に興奮が爆発する。アレが本当に現実になるのだと。

「はい、ストップ♡」

俺は、自分が射精しそうなことも忘れて必死に扱き上げていた。

現実に引き戻されて、また悶絶しながら射精感を押し殺す。

「フッ」 私の許可なく射精しちゃだめだよ♡ わかってるよね？」

これまでとは違う甘いもどかしさが溢れていく。支配される悦びに頭の中が書き換えられていく。

もう、体中が勝手に愛梨の言葉に、視線に、行動に従ってしまう。

警鐘は鳴りやまない。むしろ心臓の早鐘を同調して頭の中をさらさらめく響く。だけどもうそれは、高藤と背徳の快感を膨らませる要素としてしか動かない。

歓喜。俺は破滅させられ、俺ではないものへと変わる。彼女の奴隷に成り下がる。

今思えば、ずっと前から墮ちることを決めていたのだと思う。欲求も自覚していた。

愛梨は今日、それを洗脳によるものと明言してくれた。

もう抗えないのだと知ること。何をしても無駄。逃げようもないと受け入れること。その中で快感に墮ちる幸せ。それこそが、俺が飯野に抱いた憧れの正体だったのだ。



「もう一度聞いてあげるね？」——覚悟はいい？」

俺は画面に向かって大声で返事をした。愛梨はもちろん、それを聞いてくれた。

「うん、じゃあ行こうか。」そう言っって、また虚空中で手を動かし始める。

今度は最初から高速だった。
一気に堕とす。その意思がすぐに理解できて、俺も必死でついていく。

「好きだけ狂っていいよ、私が見てあげるから、上手に〜うね♥」
呑まれる。冷静で優し気で深い眼に、悪意に満ちた神性に、理解の及ばぬ間に、
反応が黙じみていくのを自覚する。ああ、堕ちるのってこんなにキモチイイのか。
射精の命令に従えば全てを失うことになる。怖い。嬉しくてたまらない。
フィクションがフィクションでなくなる瞬間がすぐそこに迫っている。

「今度はアナタがマソ男優になる番。 次の主役、引き受けてくれるよね？」

射精感に堪えるため全身が暴れ、方々にぶつかる。だけど快感以外の感覚がない。

「抵抗しなきゃいけない理由もあげる。 それを崩されながら壊れましょっ」

何もかもを失う予感。俺はきつと後悔をする。だけど、今は悦び以外の感情がない。



「さ、これがAVでの最後の射精。 そして私の命令でする最初の射精だよ」

クルクルクル。抵抗と葛藤と背徳の末に、それらをすべて快感に変えて爆発する。

「さあ、イキなさい。」

シンプルな言葉で。俺の全てが終わり、そして始まった。

喉が焼き切れんばかりの咆哮をあげて、俺は絶頂した。

でも手は一向に止まらない。

なぜなら、画面の中の愛梨の手が激しく上下し続けているから。

「おめでとーっ！ これまでで最高の射精でしょーっ！ フンフン」

「でもね、これからは二回二回、最高を更新し続けるんだよ！」

脈動が止まらずに延々と精液が射出される感覚に犯されていく。そのたびに快感が倍に倍に膨れ上がっていく。愛梨が最高の射精だと言ったから、魂がそっぴりして無限に気持ちよくなり続ける。錯覚かどうかなんて知らない。たっでもうっ。

「もっとイケ♡ もっともっとイケ♡ 絶頂で何も泡からなくなるのは基本だよっ

！ってイケってイケまくって馬鹿になるのが止まらない。いいんだよ、それで♡」

確かにオナニーで射精した。だが、確かに愛梨によって射精に導かれたのだ。

だからもう、俺は戻れない。気持ちいいから、従うのが止まらない。



射精の快感以外の何かが胸の奥で形になり渦を巻く。
全身に温かい幸福感を運ぶ。

絶望色をしたそれは、後悔と恍惚感で俺の中枢すら満たし支配していく。

肉体が精神と分離していくような感覚の中で、俺は愛梨の瞳に犯され続けた。

「よかったね、私のものになれて。
早く私の元においで？」
「ここが、あなたの居場所なんだから。」

俺は明日、飯野の罪を被ることをアヤに伝える。
その後、どうなるかは分からない。もしかしたらこれも嘘で、利用されるだけされた
挙句に快感を与えてもらうことをすらなく捨てられるかもしれない。
この動画を見ているのは俺だけじゃなくて、そんな「ママがたくさんいる可能性もある。

だけど、俺はもう従わずにはいられないのだ。

理性も本能も関係ない。

あの快楽を与えてもらえる可能性がある限り、縋りついてはかなくなつた。
価値観を変えられるのが洗脳だ。俺の最優先事項はもう決められてしまった。



「じゃあ、待っているね♥ おやすみなさん♡」

愛梨の優しい声が染みわたり、同時に画面がブラックアウトしていく。
そこに一言返事をして、俺は静かに目を閉じてみた。

何だっける。命も捧げる。そうやって、自ら理想の結末を手繰り寄せていく。
俺はもう視聴者じゃなく、自ら「ごまかす」も随分あることを決めた奴隷なのだから。







